

第5章 まとめ

中山道碓氷峠越は、安中市のなかでも多くの歴史的資産が残っている場所である。これらを後世に継承するために様々な取り組みを行ってきた。本章では、まとめとして、中山道碓氷峠越の歴史的資産を整理していく。また、今後の進め方もとりまとめる。

5.1 現存する歴史的資産のまとめ

(1) 全般

- ・中山道碓氷峠越の道筋は、往古から重要な道筋であった。
- ・飛鳥時代に制定された大宝律令で全国を五畿七道に分けた七道のひとつ、東山道の脇街道であり、かつ江戸時代における五街道のひとつ「中山道」として、江戸と京都を結ぶ東海道の裏通りとしての役割を担う道筋であった。
- ・本対象区間は、熊野神社からカーブ9（国道18号）の標高差約685mある約8km区間であり、木曾のかけはし、太田の渡しとともに、中山道三大難所のひとつとして知られてきた。
- ・対象とする道筋は、平成8（1996）年11月1日に文化庁「歴史の道百選」に選定され、堂峰番所跡、弘法の井戸、刎石茶屋跡、山中茶屋跡などその往時の道沿いの多数の歴史的資産が存在している。

(2) 対象区間の道筋

- ・この約8km区間の道筋は、途中の別荘跡地の約250mの区間を除くと、明治9（1876）年の旧図や、中山道分間延絵図とほぼ同じルートであることがわかった。
- ・別荘開発は、昭和40年代に行ったようで、その基盤整備のために道路工事が行われたが、現在でも「山中坂」と呼ばれる区間であり、当時から傾斜がある坂であったと考えられる。
- ・また、多くの人が行き交った江戸時代に書かれた紀行文、文書、絵図などの史資料が数多く残されており、往時の道筋やその状況を伝えている。
- ・なお、本対象区間の5地点において、道筋の発掘調査を行っているが、往時の道筋の硬化面などの痕跡は確認されなかった。
- ・本対象区間の北西にある浅間山は、江戸時代の噴火により、中山道一帯には軽石、火山灰などの火山噴出物が堆積しており、侵食されやすい地質が分布している。
- ・多くの場所では、浅間山の第四紀更新世火山岩が堆積されている地質であり、これまでの降雨や降雪などの要因で起こった侵食などにより、往時に利用された面も失われた可能性が高い。
- ・以上であるが、現在でも、この中山道碓氷峠越の道筋は、今でも多くの方が訪れたり、安中市では、毎年5月に開催する「安政遠足」のコースとして利用されている。

(3) 道沿いに点在する歴史的資産

対象区間である中山道碓氷峠越は、中山道の三大難所のひとつである。前途多難な峠越えのために、ふもとには宿場、道中には茶屋、人馬施行所が設けられた。また重要路である中山道の通行人を厳しく取り締まる関所に加え、山中には関所破りを取り締まる番所

も設けられた。これら建造物は、中山道碓氷峠越における歴史的資産にあたるものである。

茶屋や施行所、番所の建物は、現存していないが、その存在を今に伝える絵図、文書は多く残されている。また、刎石茶屋、堂峰番所がかつてあった場所には建物に関わる石積みの一部が現存し、人馬施行所がかつてあった場所には、敷石の一部が地中に現存している。

碓氷関所は、東門について、往時の柱、門扉、土台石等を使って昭和35(1960)年に、関所の平番長屋があった場所に復元されている。元々東門があった場所には、跡地を示す標柱が建っているが、西門があった場所には県道が整備されたことにより、場所は明らかではない。

以下、道沿いに点在する歴史的資産の概要を整理する。

①人馬施行所

笹沢には、助郷人馬や旅人が十分に喉をうるおすことができる施行所があった。

文政11(1828)年江戸呉服町の与兵衛が道中奉行に願い出て、安中藩から間口17間、奥行20間の土地を借り人馬の施行をした。看板には「永代人馬施行、友七祖父 施主与兵衛」と書かれ、冬になると粥や焚火を行い、飼葉を年中提供した。

与兵衛は有隣とも号し箱根や和田峠にも同様の施行所をつくった。しかし、人馬の施行は長く続かなかった。

現在は、平地(国有林内)となっており、令和2(2020)年の発掘調査では、地覆石などが確認された。

②山中茶屋

山中茶屋は碓氷峠と坂本宿の間にある茶屋のひとつで、江戸時代の慶安年間(1648~1652)に、峠町の人が川水をくみ上げるところに茶屋を開いたのが始まりとされている。寛文2(1662)年には13軒の茶屋があり、茶屋本陣の丸屋には上段の間が2箇所あった。

現在は、針広混交林(民有林内、民地)となっている。茶屋跡には平らな面が広がっており、石積みの一部や、墓が残っている。

③刎石茶屋

刎石茶屋には、中屋、玉屋、小池屋、一段下って山戸屋の4軒の茶屋があった。茶屋本陣は小池屋で庭が広く、上段の間があった。文政10(1827)年『道中商人鑑』では、大和屋小右衛門の名物砂糖餅と餅菓子・茶漬を商う小池小左衛門が記載されている。この茶屋は弘法の井戸から水をくみあげ使っていたと考えられる。「羽根石茶屋長サ三十五間」と記録にある。(『松井田町誌』647ページの文章まま：(44))

現在は、スギ・ヒノキ植林地(民有林内、民地)となっており、林内に石積みがわずかに残っている。石積みは部分的に崩落がみられる状況である。

(註44：前掲註31 刎石茶屋から弘法の井戸までの距離のこと)

④堂峰番所

堂峰番所の設置は元和2（1616）年、または元和9（1623）年ともいわれている。中山道の道筋をかえて碓氷関所設置と同時に、遠見の番所としてつくられたと「安中志」の記録には記されている。堂峰番所は、関所の抜け道を防ぐ遠見の見張番所だった。

堂峰番所はその名前が示すように小高い峰の上であり、北方と南方見張りがよくでき、しかも峰の背幅が狭まっているため、中山道を通行する旅人は此处を通過せずに碓氷峠を越え信州へは抜けられない地形的条件の場所に設けられていた。

現在は、この所に石垣があり、道の傍らに関門の礎石が草むらの中に見える（民有林内、民地）。また、堂峰番所、中山道をはさんだ南側に、間口7間、奥行4間の定附同心の家が2軒あることがわかっている。

⑤碓氷関所

元和9（1623）年、江戸幕府は関長原を通る道を廃し、横川村の碓氷川と霧積川が合流する付近に関所を設けた。碓氷関所は、概ね安中藩が管理し、東西の門を設け、各々の門から碓氷川の崖まで木柵、あるいは竹矢來が伸びており、門を通らなければ中山道を通過できなかった。東西の門は明け六ツに開き、暮れ六ツに閉じられた。東門は安中藩、西門は幕府の管轄であった。

碓氷関所は、明治2（1869）年に廃止され、敷地内の建物は解体されて安中の給人畑に移送され、江戸から引き揚げて来た人の住宅になった。また、昭和30（1955）年1月14日には、群馬県指定史跡に指定されている。

現在では、関所の平番長屋跡に、昭和35（1960）年に関所東門が復元され、石垣やおじぎ石など、当時のおもかげを今に残している。東門の位置は、標柱により示されているが、西門については、県道が整備されているために、場所は明らかとなっていない。

安中市指定重要文化財「後閑家文書」には、中山道の碓氷関所の関係史料が多く残されている。

⑥その他石造物

古道沿いの資産として、中山道の道路敷にある石造物である線刻の馬頭観世音、北向馬頭観世音、南向馬頭観世音、奉加の碑、勿石坂の石仏群があげられる。

線刻馬頭観世音は、まごめ坂を登りきった一段高いところにある。裏面には、「洞上沙門天長叟/奉書写普品第三十三卷/惣世話人當村中」と記されている。

北向馬頭観世音は、座頭転がしの下流、大きな岩の上に北を向いた馬頭観世音である。「文化十五年/信州善光寺/施主内山庄左エ門/上田庄助/坂本世話人三沢屋清助」と記されている。江戸時代後期のものである。

南向馬頭観世音は、北向馬頭観世音からさらに碓氷関所方面へ中山道を進むと、左手の一段高いところに南向きに立っている。「寛政三年/坂本宿施主七之助」と記されている。江戸時代後期のものである。

奉加の碑は、弘法の井戸の南側、現在は歩かれていない道沿いにある。銘文には「奉加/一 南鐻 一斤 江戸 伊豆蔵新兵衛/一 同 一斤 信州松本 松屋源右衛門/一 同

一斤 同長土呂村 重五郎／一 同 一斤 同前田村 元吉／一 同 一斤 後閑東左衛門／一 同 一斤 田中町 鍵屋隠居／一 金百疋 上州新田郡 高橋弥兵衛／一 金二百疋 五料村 佐藤仲右衛門／一 同 一斤 越後頸城郡 太宗治」と記されている。

また、勿石坂の途中に、馬頭観世音の碑（文政8（1825）年）、南無阿弥陀仏の碑（文政3（1820）年）、大日尊の碑（天保2（1831）年）が建っている。

5.2 今後の進め方

本報告書でまとめた中山道碓氷峠越とその周辺の往時の姿と現状をふまえたなかで、過年度まとめた整備基本計画書と照らし合わせながら、計画的に歴史の道の整備を行っていき、引き続き、関係機関等との調整を行い、国史跡指定を目指していく。

現段階で考えられる今後の進め方を整理した。

(1) 国指定に向けた取り組み

①所有者、関係機関等の調整

- ・令和6（2024）年を目標に、中山道碓氷峠越と道沿い、周辺の歴史的資産を含めて、国指定を目指す予定としている。
- ・このため、今後は、所有者、関係機関等との調整を行っていく予定である。

②安全性を確保するための道の整備の実施

- ・令和3（2021）年度には、中山道碓氷峠越の約8km区間の基本設計を行っているが、さらに指定後の来訪者増に向け、安全確保の整備が特に必要な第4工区の実施設計を進め、令和4（2022）年度からその工事を行っていく。

(2) 学術調査の実施

- ・中山道の道筋、人馬施行所の発掘調査は行っているが、刎石茶屋といった多くの道沿いの歴史的資産については、発掘調査など現地における調査を行っていない。
- ・今後は、歴史的価値を明らかにするために、土地所有者との調整などを行い、学術調査を実施することが重要である。

註・参考文献一覧

註

- 註 1：幕府や大名その他領主が設けたものを含める 文献 2-1 を参照
註 2：文献 2-2 を参照
註 3：文献 2-9 を参照
註 4：文献 2-11 を参照
註 5：文献 2-13 を参照
註 6：文献 2-14 を参照
註 7：文献 2-15 を参照
註 8：文献 2-18 を参照
註 9：文献 2-20 を参照
註 10：文献 2-22、文献 2-23 を参照
註 11：文献 2-24 を参照
註 12：文献 2-26 を参照
註 13：文献 3-2 を参照
註 14：文献 3-4 を参照
註 15：文献 3-7 を参照
註 16：文献 3-8 を参照
註 17：文献 3-9 を参照
註 18：文献 3-11 を参照
註 19：文献 4-20 を参照
註 20：文献 4-21 を参照
註 21：文献 4-22 を参照
註 22：文献 4-23 を参照
註 23：文献 4-24 を参照
註 24：文献 4-25 を参照
註 25：文献 4-26 を参照
註 26：文献 4-31 を参照
註 27：文献 4-32 を参照
註 28：文献 4-31 を参照
註 29：文献 4-33 を参照
註 30：文献 4-31 を参照
註 31：刎石茶屋から弘法の井戸までの距離のこと
註 32：文献 4-35 を参照
註 33：文献 4-36 を参照
註 34：文献 4-37 を参照
註 35：文献 4-39 を参照
註 36：文献 4-41 を参照
註 37：文献 4-43 を参照
註 38：文献 4-44 を参照
註 39：文献 4-47 を参照
註 40：文献 4-52 を参照
註 41：文献 4-55 を参照
註 42：文献 4-58 を参照
註 43：文献 4-59 を参照
註 44：前掲註 31 刎石茶屋から弘法の井戸までの距離のこと

参考文献一覧

<第1章>

- 文献 1-1) 安中市、数値地形図データファイル（地図情報レベル 10000）、
文献 1-2) 国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス、<https://mapps.gsi.go.jp/>

<第2章>

- 文献 2-1) 群馬県県史編さん委員会編集、『群馬県史通史編 5 近世 2』、平成 3(1991)年、群馬県、p.786～789
文献 2-2) 群馬県安中市教育委員会編集刊行、『安中市遺跡分布地図・市内遺跡詳細分布調査報告書』、平成 23 (2011) 年、p. 86
文献 2-3) 林野庁業務資料を一部引用して作成
文献 2-4) 環境省、上信越高原国立公園概要・計画書、上信越高原国立公園（草津・万座・浅間地域）区域及び公園計画図（4）、平成 19 (2007) 年
<http://www.env.go.jp/joshinetsu/intro/index.html>
文献 2-5) マッピングぐんまホームページ、「土砂災害危険箇所図」、平成 20 (2008) 年、群馬県庁 県土整備部 砂防課
<https://www2.wagnap.jp/pref-gunma/Map?mid=75&px=138.76739981347086&py=36.34277318370228&bsw=1903&bsh=969>
文献 2-6) 群馬県安中市教育委員会編集刊行、『安中市遺跡分布地図・市内遺跡詳細分布調査報告書』、平成 23 (2011) 年、p. 142
文献 2-7) 安政遠足待マラソン大会ホームページ、安政遠足保存会事務局
<https://ansei-toashi.jp/>
文献 2-8) 安中市、安中市基礎調査分析業務【戦略検討の基礎資料】報告書、平成 27 (2015) 年、安中市、p. 40～41
文献 2-9) 松井田町教育委員会編集刊行、『松井田町の文化財（改訂版）—歴史散歩—』、平成 13 (2001) 年、p. 11～14
文献 2-10) うすいの歴史を残す会編集刊行、『碓氷関所周辺 歴史探訪ロードガイドブック』、平成 25 (2013) 年、p. 1
文献 2-11) 松井田町教育委員会編集刊行、『松井田町の文化財（改訂版）—歴史散歩—』、平成 13 (2001) 年、p. 9～10
文献 2-12) 後閑武彦氏所蔵、安中市寄託
文献 2-13) 岡田昭二（中山道碓氷峠整備検討委員会委員）、安中市松井田町横川、後閑家文書の概要 令和 2 (2020) 年、p. 1～2
文献 2-14) 松井田町教育委員会編集刊行、『松井田町の文化財（改訂版）—歴史散歩—』、平成 13 (2001) 年、p. 80～81
文献 2-15) 松井田町教育委員会編集刊行、『松井田町の文化財（改訂版）—歴史散歩—』、平成 13 (2001) 年、p. 81
文献 2-16) 松井田町誌編纂委員会編集刊行、『松井田町誌』、昭和 60 (1985) 年、p. 633
文献 2-17) 碓氷峠くつろぎの郷、「くつろぎの郷散歩コース 坂本宿めぐり」
文献 2-18) 松井田町誌編纂委員会編集刊行、『松井田町誌』、昭和 60 (1985) 年、p. 685～698
文献 2-19) 松井田町誌編纂委員会編集刊行、『松井田町誌』、昭和 60 (1985) 年、p. 655
文献 2-20) 松井田町誌編纂委員会編集刊行、『松井田町誌』、昭和 60 (1985) 年、p. 962～964
文献 2-21) 宮内庁、「明治天皇紀 卷八十二」、『明治天皇紀 第四』、昭和 45 (1970) 年、吉川弘文館、p. 477～478
文献 2-22) 児玉幸多、『近世交通史の研究』、昭和 61 (1986) 年、筑摩書房、p. 33～36
文献 2-23) 今井幹夫、「姫街道と西牧関所」、『群馬歴史散歩 第 183 号』、平成 16 年、群馬県歴史散歩の会、p. 12～20
文献 2-24) 群馬県県史編さん委員会編集、『群馬県史通史編 5 近世 2』、平成 3(1991)年、群馬県刊行、p. 704～705

- 文献 2-25) 群馬県史編さん委員会編集、『群馬県史通史編 5 近世 2』、平成 3(1991)年、群馬県刊行、p. 704～705
- 文献 2-26) 群馬県史編さん委員会編集、『群馬県史通史編 5 近世 2』、平成 3(1991)年、群馬県刊行、p. 659～660
- 文献 2-27) 群馬県教育委員会文化財保護課編集、『下仁田道』、昭和 56 (1981) 年、群馬県教育委員会、p. 24 一部追記
- 文献 2-28) マッピング群馬ホームページ、「森林計画図」、令和 2 (2021) 年、群馬県庁 森林環境部 林政課
<https://www2.wagmap.jp/pref-gunma/ThemeSearch?mid=154>

<第 3 章>

- 文献 3-1) 国土交通省気象庁ホームページ、過去の気象データ「群馬県一の字山」
https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php?prec_no=42&block_no=0352&year=&month=&day=&view=
- 文献 3-2) 松井田町誌編纂委員会編集刊行、『松井田町誌』、昭和 60 (1985) 年、p. 2～3
- 文献 3-3) 国土交通省、地形分類図 (5 万分の 1 都道府県土地分類基礎調査 (軽井沢))、国土調査 (土地分類調査・水調査)、平成 10 (1998) 年発行
<https://nlftp.mlit.go.jp/kokjo/tochimizu/F3/data/L/1009L.jpg>
- 文献 3-4) 熊原康博、『上州中山道の地形散歩』、上毛新聞社事業局出版部、平成 25 (2013) 年、p. 67～70
- 文献 3-5) 安中市産業部商工観光課安中市観光協会、旧道日和一旧中山道碓氷の峠越え道パンフレット
- 文献 3-6) 赤色立体地図 ©アジア航測株式会社
- 文献 3-7) 松井田町誌編纂委員会編集刊行、『松井田町誌』、昭和 60 (1985) 年、p. 7
- 文献 3-8) 松井田町誌編纂委員会編集刊行、『松井田町誌』、昭和 60 (1985) 年、p. 6
- 文献 3-9) 熊原康博、『上州中山道の地形散歩』、上毛新聞社事業局出版部、平成 25 年、p. 69
- 文献 3-10) 国土交通省、表層地質図 (5 万分の 1 都道府県土地分類基礎調査 (軽井沢))、国土調査 (土地分類調査・水調査)、平成 10 (1998) 年発行
<https://nlftp.mlit.go.jp/kokjo/tochimizu/F3/data/G/1009G.jpg>
- 文献 3-11) 黒板勝美編、『新訂増補 国史大系 第 38 巻～49 巻』、平成 19 (2007) 年、吉川弘文館
- 文献 3-12) 高崎市等広域市町村圏振興整備組合立かみつけ里博物館、「第 16 回特別展 最新の遺跡発掘調査からみた江戸時代、浅間山大噴火」、平成 19 (2007) 年、p. 48
- 文献 3-13) 高崎市等広域市町村圏振興整備組合立かみつけ里博物館、「第 16 回特別展 最新の遺跡発掘調査からみた江戸時代、浅間山大噴火」、平成 19 (2007) 年、p. 7
- 文献 3-14) 環境省、現存植生図 (第 2 回自然環境保全基礎調査 (植生調査) (5 万分の 1 軽井沢))、昭和 56 (1981) 年発行
- 文献 3-15) 鈴木魚都里、『復刻北国街道分間絵図中巻』、平成 10 (1998) 年、郷土出版社

<第 4 章>

- 文献 4-1) 内務省東京土木出張所、『碓氷峠道路の今昔』、昭和 9 (1934) 年
- 文献 4-2) 松井田町誌編纂委員会編集刊行、『松井田町誌』、昭和 60 (1985) 年
- 文献 4-3) 安中市史刊行委員会編集、『安中市史第 1 巻自然編・近代現代資料編 2』、別冊付録「安中市産無脊椎動物目録」、平成 12(2000)年、安中市
- 文献 4-4) 安中市史刊行委員会編集、『安中市史第 2 巻通史編』、別冊付録「安中歴史年表」、平成 15(2003)年、安中市
- 文献 4-5) 安中市史刊行委員会編集、『安中市史第 3 巻民俗編』、平成 10(1998)年、安中市
- 文献 4-6) 安中市史刊行委員会編集、『安中市史第 4 巻原始古代中世資料編』、平成 13(2001)年、安中市

- 文献 4-7) 安中市史刊行会編集、『安中市史第 5 巻近世資料編』、別冊付録「風土記編」、平成 14(2002)年、安中市
- 文献 4-8) 安中市史刊行委員会編集、『安中市史第 6 巻近代現代資料編 1』、別冊付録「人々の暮らし」、平成 14(2002)年、安中市
- 文献 4-9) 安中市誌編纂委員会編集刊行、『安中市誌』、昭和 39(1964)年
- 文献 4-10) 松井田町、「松井田町地形図 3、6、7」、平成 3(1992)年、国際航業株式会社調製
- 文献 4-11) 国土地理院、「国土地理院ウェブサイト 古地図コレクションホームページ 伊能図」、<https://kochizu.gsi.go.jp/inouzu>
- 文献 4-12) 群馬県行政文書、「官林簿」、明治 14-15(1881-1882)年
- 文献 4-13) 「上野国碓氷郡坂本駅図」、明治 9(1876)年、安中市所蔵
- 文献 4-14) 「岐蘇路安見絵図」、宝暦 6(1756)年、安中市教育委員会所蔵
- 文献 4-15) 鈴木魚都里、「復刻北国街道分間絵図中巻」、平成 10(1998)年、郷土出版社
- 文献 4-16) 「須藤登喜江家資料中山道絵図」、安政 5(1858)年、安中市教育委員会所蔵
- 文献 4-17) 「木曾海道六拾九次之内 坂本」、天保 6~7(1835-36)年、中山道広重美術館所蔵
- 文献 4-18) 「中山道分間延絵図 第六巻」、昭和 54(1979)年、東京美術、東京国立博物館所蔵
- 文献 4-19) 国土地理院、「地図・空中写真閲覧サービス」ホームページ、空中写真 CKT7511、C15-23、昭和 50(1975)年、
<https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>
- 文献 4-20) 群馬県史編さん委員会編集、『群馬県史通史編 5 近世 2』、平成 3(1991)年、群馬県刊行、p. 633~635
- 文献 4-21) 児玉幸多、『近世交通史の研究』、昭和 61(1986)年、筑摩書房、p. 9~14
- 文献 4-22) 吉川弘文館編集部編、『徳川実紀事項索引 上巻 あーし』、平成 15(2003)年、吉川弘文館
吉川弘文館編集部編、『徳川実紀事項索引 下巻 そーを』、平成 15(2003)年、吉川弘文館
黒板勝美編、『新訂増補 国史大系第 38 巻~49 巻』、平成 19(2007)年、吉川弘文館
- 文献 4-23) 群馬県史編さん委員会編集、『群馬県史通史編 5 近世 2』、平成 3(1991)年、群馬県刊行、p. 667~670
- 文献 4-24) 群馬県史編さん委員会編集、『群馬県史通史編 5 近世 2』、平成 3(1991)年、群馬県刊行、p. 706~709
- 文献 4-25) 「天明・浅間焼 文書」、天明 3(1793)卯年
- 文献 4-26) 佐藤義一、「恩賀村と郷倉」、『宇須比第 6 号』、昭和 53(1978)年、松井田文化会、p. 2~5
- 文献 4-27) 丸山一彦校注、『一茶七番日記(下)』、平成 15(2003)年、岩波文庫
- 文献 4-28) 金井方平編、淡路博和監修、『文政五年 金井忠兵衛旅日記 板鼻→長崎』、平成 3(1991)年、あさお社、p. 28~30
- 文献 4-29) 安中市学習の森ふるさと学習館所蔵
- 文献 4-30) 国土地理院、「地図・空中写真閲覧サービス」ホームページ
<https://mapps.gsi.go.jp/>
- 文献 4-31) 松井田町誌編纂委員会編集刊行、『松井田町誌』、昭和 60(1985)年、p. 647
- 文献 4-32) 児玉幸多校訂、『近世交通史料集 5 中山道宿村大概帳』、昭和 46(1971)年、吉川弘文館
- 文献 4-33) 松井田町教育委員会編集刊行、『松井田町の文化財(改訂版) 一歴史散歩一』、平成 13(2001)年、p. 81
- 文献 4-34) 松井田町誌編纂委員会編集刊行、『松井田町誌』、昭和 60(1985)年、p. 645~646
- 文献 4-35) 群馬県碓氷郡役所、「弘法大師の慈悲の水と不動尊」、『復刻版 碓氷郡志』、昭和 48(1973)年、碓氷郡志刊行会、p. 291

- 文献 4-36) 松井田町誌編纂委員会編集刊行、『松井田町誌』、昭和 60 (1985) 年、p. 543
- 文献 4-37) 松井田町教育委員会編集刊行、『松井田町の文化財 (改訂版) —歴史散歩—』、平成 13 (2001) 年、p. 82
- 文献 4-38) 「後閑家文書」堂峰御番所間数、後閑武彦氏所蔵、安中市寄託
- 文献 4-39) 松井田町誌編纂委員会編集刊行、『松井田町誌』、昭和 60 (1985) 年、p. 545～546
- 文献 4-40) 安中市、群馬県指定史跡碓氷関所周辺測量委託、「平面図 (復元図) 安中市松井田町坂本地内 (堂峯番所跡周辺)」、平成 21 (2009) 年
- 文献 4-41) 安中市教育委員会学習の森文化財係編集、『安中市の文化財』、平成 20 (2008) 年、安中市教育委員会、p. 23
- 文献 4-42) 安中市学習の森ふるさと学習館、『碓氷関所事歴 (復刻版)』、平成 24 (2012) 年、安中市教育委員会
- 文献 4-43) 松井田町誌編纂委員会編集刊行、『松井田町誌』、昭和 60 (1985) 年、p. 455～457
- 文献 4-44) 松井田町誌編纂委員会編集刊行、『松井田町誌』、昭和 60 (1985) 年、p. 461～463
- 文献 4-45) 群馬県県史編さん委員会編集、『群馬県史通史編 5 近世 2』、平成 3 (1991) 年、群馬県刊行、p. 788
- 文献 4-46) 群馬県県史編さん委員会編集、『群馬県史通史編 5 近世 2』、平成 3 (1991) 年、群馬県刊行、p. 806
- 文献 4-47) 松井田町誌編纂委員会編集刊行、『松井田町誌』、昭和 60 (1985) 年、p. 461～463
- 文献 4-48) 松井田町誌編纂委員会編集刊行、『松井田町誌』、昭和 60 (1985) 年、p. 462
- 文献 4-49) 「薄井御関所」、鉄道博物館所蔵
- 文献 4-50) 安中市所蔵
- 文献 4-51) 群馬県ホームページ、「文化財保護審議会 平成 22 年度第 2 回開催結果」
<https://www.pref.gunma.jp/03/x4500006.html>
- 文献 4-52) 松井田町誌編纂委員会編集刊行、『松井田町誌』、昭和 60 (1985) 年、p. 458
- 文献 4-53) うすいの歴史を残す会、『関所のまち・よこかわ (改訂版)』、平成 11 (1999) 年、あさを社、p. 16
- 文献 4-54) うすいの歴史を残す会、『関所のまち・よこかわ (改訂版)』、平成 11 (1999) 年、あさを社、p. 17
- 文献 4-55) 金井達雄著、『中山道碓氷関所の研究上巻』、平成 9 (1997) 年、文献出版、p. 535～546
 金井達雄著、『中山道碓氷関所の研究下巻』、平成 9 (1997) 年、文献出版、p. 9～11
- 文献 4-56) 国土地理院、「地図・空中写真閲覧サービス」ホームページ
<https://mapps.gsi.go.jp/>
- 文献 4-57) 安中市教育委員会所蔵
- 文献 4-58) 松井田町誌編纂委員会編集刊行、『松井田町誌』、昭和 60 (1985) 年、p. 260～261、p. 274～275
- 文献 4-59) 松井田町教育委員会編集刊行、『松井田町の文化財 (改訂版) —歴史散歩—』、平成 13 (2001) 年、p. 79
- 文献 4-60) 松井田町誌編纂委員会編集刊行、『松井田町誌』、昭和 60 (1985) 年、p. 279
- 文献 4-61) 森田与四郎、『新編 碓氷峠と坂本宿』、昭和 59 (1984) 年、吾妻書館、p. 100
 伊丹仲七、表紙および「※表紙について」、『宇須比第 79 号』、令和元 (2019) 年、松井田文化会、p. 49
- 文献 4-62) 安中市、数値地形図データファイル (地図情報レベル 10000)

資 料 編

資料 1 : 中山道に関する案内パンフレット

資料 2 : 中山道碓氷峠越に関する史資料

「遊歩道アプトの道とその周辺」 見どころガイド

めがね橋をはじめとする
碓氷峠の鉄道施設は
国指定重要文化財です



碓氷峠を歩こう

横川駅西側。アプトの道起点 終点
ポイントから始まる遊歩道アプトの道。
碓氷峠鉄道文化むらの北側、旧中山道。
碓氷関所跡にも立ち寄りましょう。

アプトの道に戻り、旧丸山変電所か
ら、途中碓氷湖散策。3つのトンネルを
抜けて4連アーチ橋赤レンガの碓氷第
3橋梁(めがね橋)の上を渡り、6.7.
8・9・10号トンネルを抜けて、熊ノ平
までを歩く道。碓氷峠の周辺は、どなた
でも気軽に安全に歩いて探訪できます。

熊ノ平

駐車場・簡易トイレ有



熊ノ平は信越本線が通わなくなり、今はアプトの道の折返しポイントとして生まれ変わりました。当初単線であった期間、横川～軽井沢間で唯一の平地であった熊ノ平駅では、上下線の列車が待ち合わせてすれ違いをしていました。この頃の熊ノ平駅は、行楽の季節、乗降客で賑わっていました。そして信越本線が複線化すると、熊ノ平駅は、変電所の機能を残して、駅としての機能は必要とされなくなりました。



手前9号、その奥に8号トンネル



排煙口のある6号トンネル内部



めがね橋

駐車場有



めがね橋無料駐車場

芸術的で多くの人を魅了する、レンガ造りの4連アーチ式鉄道橋。橋上からの展望も楽しめます。アプトの道は、ここから熊ノ平まで1.2kmが延長されました。めがね橋駐車場も完成。橋の下からも上る道があります。

見どころいっぱいの碓氷峠を巡る遊歩道アプトの道をゆっくりと散策してみませんか。



碓氷湖

駐車場・トイレ有

山景色に映える静かな湖。

碓氷峠鉄道文化むら ☎027-380-4163

鉄道の歴史と列車が一同に集められているテーマパーク。入口のゲートを入ると、小さな子供から大人まで楽しめるSL「あぶとくん」が人気の的。本物の機関車を運転体験できるコースやスラリ展示された歴史的名車には、見て、触れることもできます。



アプトの道と平行して走る碓氷峠のトロッコ列車「シェルパくん」

文化むらから途中まではアプトの道の横を峠のトロッコ列車が走っています。トロッコ列車の運行は、基本的に(土・日と祝日)ですが、臨時運行もあります。詳細はお問い合わせください。



休園日は毎週火曜日 火曜日が祝日の場合は翌日休園および年末年始 営業は9:00から

碓氷関所跡 東門



関所の西門は徳川幕府、東門は安中藩が管轄した、国境の関所跡。箱根の関所と並び、日本三大関所跡の一つです。



1号トンネルの手前にある北原白秋の歌碑

坂本宿



向こう正面が剝石山です。

旧丸山変電所・まるやま駅

碓氷峠を行き来する列車に電力を供給するため、明治44年に建てられた機械室棟と蓄電池室棟は、国の重要文化財です。建物と峠のトロッコ列車の駅との間にアプトの道があります。



碓氷峠くつろぎの郷

「宿泊コテージ」



☎027-380-4180

〒267-0115 群馬県安中市松井田町新堀245

宿泊コテージは、峠の湯に隣接した本格的フィンランド風ログハウスづくりの宿泊施設。全7棟あり、42名様まで宿泊可能です。管理棟もあり、仲間同士やファミリーで利用することをすすめます。



天然温泉「峠の湯」平成25年12月現在休館中です。ご迷惑をおかけしております。リニューアルまでしばらくお待ちください。

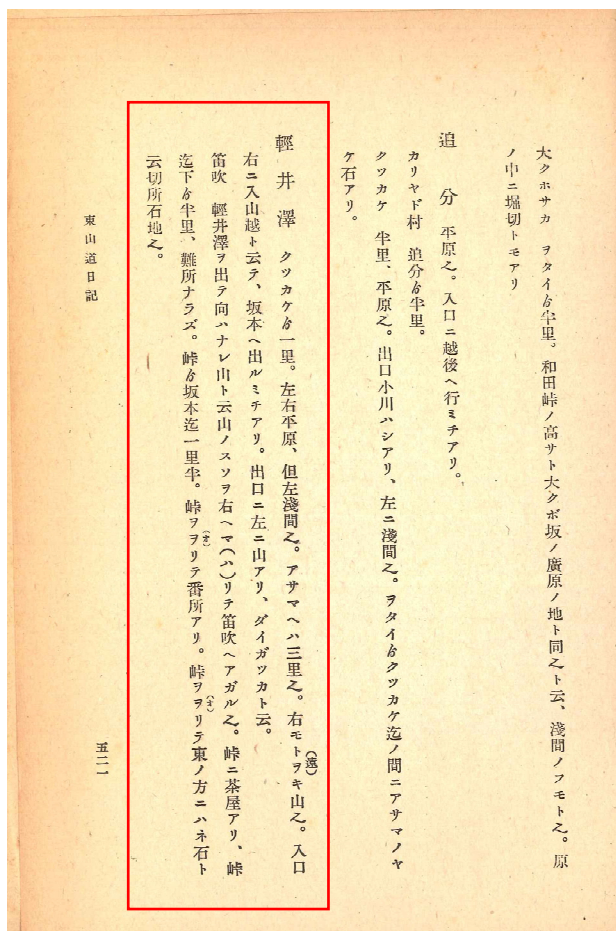
安中市 産業部 商工観光課 ☎027-382-1111

〒379-0292 群馬県安中市松井田町新堀245 FAX 027-386-4111

2013.12.10

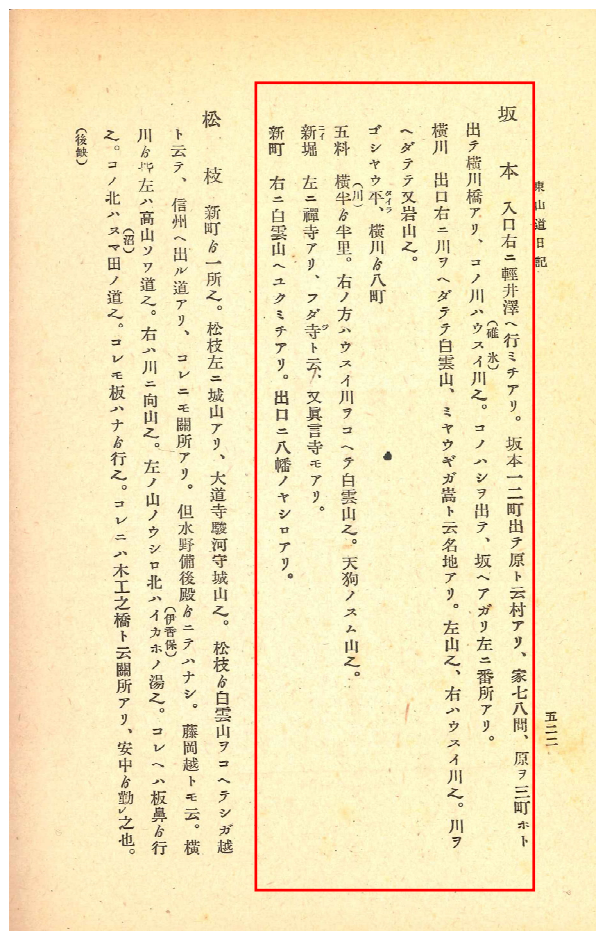
資料2 中山道碓氷峠越に関する史資料

a) 東山道日記 (承応3 (1654) 年)



出典：『東山道日記』、承応三（1654）年、山鹿素行集 第七巻

軽井沢 沓掛から一里、左右は平原で左に浅間、浅間へは三里。右にも遠くに山、入口右に入り山を越えると坂本に出る道がある。出口左に山があり、ダイガツカという。
 笛吹 軽井沢を出て山裾を右に回って笛吹に上がると峠に茶屋がある。峠から下り半里は難所ではない。坂本までは一里半、峠を下りると番所がある。峠を下りで東の方に芻石という石が切れた地がある。



出典：『東山道日記』、承応三（1654）年、山鹿素行集 第七巻

坂本 入り口右に軽井沢へ行く道がある。坂本から十二町出ると原村がある。家は七八間、原村を三町ほど行くと横川橋がある。この川は碓氷川である。この橋を出て、坂を上がると左に番所がある。
 横川 出口を右に行くと川を隔てて白雲山、ミヤウギガという名地がある。左には山、右には碓氷川がある。川を隔ててまた岩山がある。ごしょう平は横川から八町。

c) 千曲之真砂 (宝暦3 (1753) 年)

るへし、ある人碓氷の紅葉の頃、髪を漚りて甚た是を賞し詠る歌、里人間とめて書付置たるを見たり、おしる哉、其名をも所をも書とめず、よみ人しれすとしてあり、堂上たるや地下たるや其名をしらぬこそかへすくも口おしけれ、山の名はうすめといへといくちしほそめて色とききまのふみちひ、詠に歌から誰人の詠ならしと人々申あひぬ。

○なかまな

何れの所といふをしらず、歌からをもつて見れり、千曲・庄川・天竜川・木曾川などの大河の岸さかしき所と見ゆ、歌枕秋の覺覚にも山野・岸・川・原・沢・なんど、いつれの郡にも不明なる歌が、碓氷部へ出せり、今何れの所とも弁へかたし、後考を待て補はんとして、

○小野滝
上松より須原へ行間にある滝也、当國にならひなき大滝也、万仞の高嶺よりたゞに落ちて、煙四方に霧をふらし、嵐も吹かず、其響いとすさまじ、銀河の九天より落るといわんか、されと名所歌枕に入らず、昔細川玄

ともいへる高山有、八ヶ嶽よりつゞき、其高きこといふべからず、其嶺坂を盛たる様ニ見ゆる故、爾言也、高井山とハ此ことなる由、頂上に立科八王子権現の社有、其里宮芦田古町と言に有り、是を高井明神と言、立科の社のふしおかみ也、また山上の岩窟に清泉有、いかなる大早炎天にも水たへず、高き井なれば、是を高井と稱すといへり、是によりて明神の称号とす、しかれり、高井山なること分明也、此山至つて高く、盛夏にも雪有、又山上に小き鴉の如くなる鳥あり、是を見るに全く鴉にあらす、雉子の雌に似て背黒く腹白し、数百羽群散し飛行す、されと高く飛び山を離ることなし、披に、鴉の種類ならハ、雪中の高山、夏も寒風列しき崖巖の山中三冬の頃いかに一日も遊はんや、是ハ全く越の白山に任といふ鳩鳥のたぐひなるべし、詠に世に希有なる鳥なり、

○二代実録曰、元慶二年戊戌秋九月十六日、授信濃國妻科神正六位上、△按ニ、今ノ立科権現タルヘキ塚、今世俗為願望、以蓼為斷物、然レハ蓼ト立ノ謬リ

タルヘキカ、又今國中ニ蓼科ノ社ト号スル無シ、此神タルヘシ、

○いくら山 又伊豆トモ
ある人の曰、是ハ佐久郡川上居倉村の白山の大山を云るとなん、今ハ所の者小川山と云り、秋の覺覚にハ伊倉山と書ケリ、然其此山のことおしへ待りし、

○うすめ山
是ハ信濃・上野の界にて、嶺より西ハ信州・嶺のあなたハ東上州也、されハうすめの坂といわ、上野、うすめの山といわ、信州なるへしとある人申さ、されとも坂とも山共通用して詠來るなるへし、穿鑿に渡るへからす、此所中尾といへる谷合の紅葉、近国無双の景なり、暮秋の後は目を悦ハしめ、詠に錦繡の山とも詠へし、ひとし中尾大納言殿此紅葉を賞し、詠歌あり、それより後ハ領主より毎年紅葉の盛に人を遣ハし、是を取紙に撰み、長巻におさめ、京師の堂上、東武の教習人風雅好事の人々江送りたまふ、今ハ是例となりて廢すことなく名産となりぬ、享保の末元文のはしめな

冒法印幽齋翁此所を吟行し玉ひしも、木曾路の小野と滝といへるり、布引・箕尾などにもおさく、おとりやハする、是程のもの、此國の歌枕にハいかにしてかもらしぬるやと書給へり、又丙寅の年鳥丸左大臣光榮卿の紀行にも、小野と滝といふ有、そなたちたるいわほのことに高きより、物にもさへらて一筋にそ落ける、つまなこる小野と名高き滝なれや山かすかなる中に音して、と詠し玉へり、是より名所の様になりぬ、其ハ堂上の歌にも多くあるぞなん、歌枕として風景のおもしろきこといつくに有へうもなし、

○寝覚の床
是も上松と須原との中間也、名所にハあらず、されと久しく諸人のかたりあふ所也、近衛殿亦ハ小倉大納言実記卿・鳥丸大納言光広などと詠歌によりて遺に名所となりぬ、しかし浦島太郎此所に釣することいふかし、諸史に見へず、また謡曲も作る所の覺覚といへるに、三篇翁といふもの、此所にて不死の薬をあたへ、また飛雲といふ謡曲にあやしき人、三熊野詣の山伏に此所

出典：『千曲之真砂』、宝暦3 (1753) 年

碓氷山

信濃・上野の境であり、嶺から西は信州、嶺の彼方は東上州、碓氷の坂は上野、碓氷の山は信州とある人はいふ

中尾という谷合の紅葉は近国無双の景観

紅葉はよく歌に詠まれている

c) 千曲之真砂 (宝暦3 (1753) 年)

佐久・諏訪の両郡、木曾谷の内日本無双の寒氣と謂へし、
 ○藻塩草曰、しなのゝ国は坂東一高き国なり、甲斐よりも登り、越後よりもほる、美濃よりも登るといへり、
 ○日本事跡考に曰、^{上略}地高而寒、群川之長大者其源多ク自此国流出ル、
 △私曰、此国外ヨリ流入ル水無シ、近国大河此国ヲ川源トス、其大略、○自諏訪湖天竜川、南方遠州へ流レ、○自鳥居峠木曾川、南へ流テ美濃へ落、○自駒ヶ嶽犀川出、北へ流レ、至水内郡千曲川ト合シ、○自金峯山千曲川出、北流レ、犀川ト合シ、下越後新潟ニ至テ海ニ入、○自川上山東荒川出、武州へ流、果ハ隅田川ト成ル、○自八ヶ嶽南釜無川出、東南へ落、富士川ト成ル、○自浅間山出、後利根川出、○自碓氷山碓氷川出、東流シ、末ハ鳥川ト合シテ利根川へ落、○自同山北角打ヶ嶽鳥巖川へ出、碓氷・蕪川二川ト合シテ、利根川へ落、○自安曇郡佐野嶺西北

姫川出、北流シ越後海ニ入、○自水内郡野尻湖水関川出、高田へ落海ニ入、○自伊奈郡与甲州境大井川出、東海道へ落、○其外小川源不暇枚挙、如此ナルカ故、地高キ事日本無双ト謂ヘシ、○又雪ノ降事ハ多カラスト雖、寒氣甚キ事ハ他国ニ可準固無シ、依テ少シ降タル雪モ旬ヲ越ヘ月ヲ重テモ消ル事ナシ、
 ○又曰、水内・高井兩郡越国ニ隣ル所ハ北越ニ不劣雪降ル事多シ、常ニ尺余ニ及ヒ、大雪ト云時ハ丈余ニ至ル、往来雪車・櫛又ハ雪竿ヲ用ユ、二月末ニ至リ雪消ル後見之、草鞋等樹頭ニ掛レリ、然レトモ寒氣ハ諏訪・佐久二郡ヨリハ暖也、雪ハ少シト雖風烈ク、寒氣甚事ハ諏訪・佐久又ハ木曾谷辺尤日本ニ双ヒ無シトナリ、
 ○碓氷嶺、信濃上野国境也、碓氷郡ハ上野ナレトモ碓氷山又ハ坂ナト、詠シ、古ヨリ信濃名所部入也、
 △私曰、碓氷坂、古ノ名信濃坂トモト云、○日本紀卷二十二曰、推古天皇三十五年夏五月、有蠅聚集、其凝累十余丈、浮虚以越信濃坂、鳴音如雷、則東至上野国而自散ト云、

出典：『千曲之真砂』、宝暦3 (1753) 年

碓氷峠
 信濃と上野の境にあたる。古くからの信濃の名所。

e) 壬戌紀行 (享和2 (1802) 年)

を炊たる所也といふ。小流あり。石橋をわたりにて、驛井沢の駅に在る。こゝはあやしのうかれ女のふしどときけば、さしのぞきてみるに、いかにもひなびたれど、さすがに前の駅より賑はしくみゆ。驛下に「國の名物」八そばといふかけろ多し。「驛井沢」のぼろんとして、賑より下り徒よりゆく。ひぢり沢よりから沢などいへる長き坂を上るに、此比の寒さに衣をかきわたるが、やゝあつき心地すれば、立湯の茶屋にこひて衣ぬがんとするに、道のほとりに麻の上下まで出てひざまづくものあり。「誰ぞ」とへば、「此山の上なる能野権現の神主なり。をのがどりに案内して昼のやすみとらせん」といへど、けふは能野権現の祭として、人、講とかや、社をむすぶるもの、よりつどひて、神楽をすゝめ酒のみ物くふさまみゆれば、人だち多き所にまじはらんもうるさく、やう／＼にすかしこしらへて権現の社にもまうでず、峠の立ばにもいこはずして行過ぬ。左の山ぎはに二王堂あり。金剛力士の像古くみゆ。此所信濃と上毛野の界也といふ。はつ坂、長坂をこえて、笹沢といふ所にいたる。清水ながれ出づ。丸き山あり。子持山といふ。姥がふところ、ばらむきが平などいふ所をすく。このあたりより吾妻のかたをながめやるに、日本武尊のむかし思ひ出らる。春のなごりのかずみわたれる山、のけしき、いふもならなり。山中坂を上りて立湯あり。賑はしき茶屋也。餅うるの家あり。山中村といふ。八重桜の花、今をさかり也。まごめ坂を過て右のかたに、けしき岩山ならびたり。はやしの山といふ。麓に御林あり。板倉伊予守の御預所なり。八人山伏といふ岩ありて、八つの岩ならびたり。又地藏岩といふあり。そのうしろは妙義の山也といふ。これまで岩山をみしかど、かゝる険しき岩の色黒きが雲をしのぎてたてるをみず。唐圃にかけの山のごとし。人道がくぼをすき、くりから平にいたる。これより左のかたをみれば、又さがしき岩あり。天狗岩といふ。そのむかふに榛名山あり。赤城の山もつらなりてみゆ。ゆき／＼たぐちに絶壁にのぞむ。こゝを鹿頭ころしといふもむべなり。日しみのものはおちいぬべし。ほそき道を左にとりて、かんば坂をすきゆけば、左右ともに深き谷にして、たゞ一筋のほそき道あり。堀きりと名づく。わかし壘田小田原を攻めし時、大道寺駿河守政繁この坂をほりきりて北国勢をふせぎしが、上杉景勝、前田利家のためにやぶられしとせん。まことにさがしき切所といふべし。はんね石といふ所に石多し。鯉宮あり。風穴などいへる谷々をきて赤土坂を下り、松木坂を下りゆけば左に島田あり。坂本の駅につく。こよひは「肥前少将泊」といへるせきれありて、本陣、脇本陣よりはじめて語士のやどりみち／＼たり。かなき屋

壬戌紀行 下

壬戌紀行

一現、北佐久郡驛井沢町驛井沢。本會路之記
 二現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 三現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 四現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 五現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 六現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 七現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 八現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 九現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 十現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 十一現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 十二現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 十三現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 十四現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 十五現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 十六現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 十七現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 十八現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 十九現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 二十現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 二十一現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 二十二現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 二十三現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 二十四現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 二十五現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 二十六現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 二十七現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 二十八現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 二十九現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 三十現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 三十一現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 三十二現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 三十三現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 三十四現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 三十五現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 三十六現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 三十七現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 三十八現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 三十九現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 四十現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 四十一現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 四十二現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 四十三現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 四十四現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 四十五現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 四十六現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 四十七現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 四十八現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 四十九現、北佐久郡四十一年、本會路之記
 五十現、北佐久郡四十一年、本會路之記

四〇三

四〇一

出典：『壬戌紀行』、享和2 (1802) 年

碓氷峠をのぼる途中には、ひじり沢から、から沢へは長い坂。そして立場の茶屋がある。

左の山際には二王堂があり古い金剛力士像が設置されている。ここは信濃と上毛野の境にあたる。

はつ坂、長坂を超えると、清水が流れる笹沢に出る。丸い山は子持山という。

山中坂を上ると賑やかな餅を売る立場がある。ここは山中村である。まごめ坂を過ぎた右肩には、はやしの山という険しい岩山が並んでいる。

八人山伏という岩があり、八つの岩が並んで立っている。地藏岩の後ろに妙義山がある。険しい黒い岩が立つ。

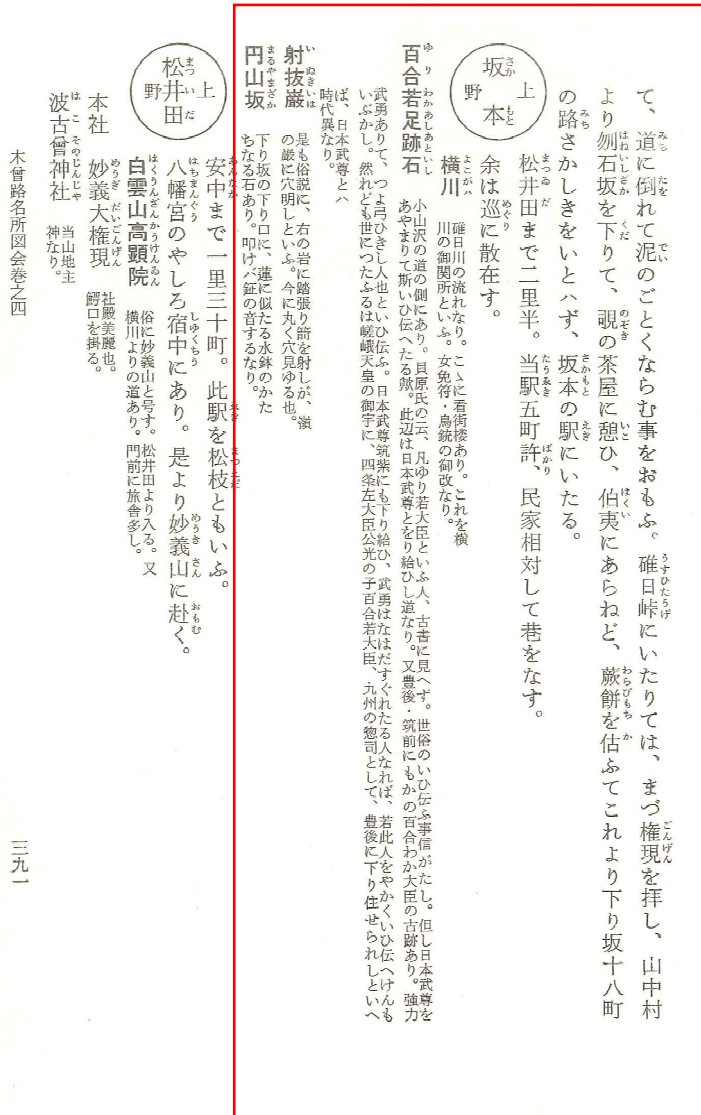
入道くぼを過ぎ、くりから平に入り、左方をみると天狗岩がある。その向かいに榛名山があり、赤城山も連なって見える。

細い道を左に行き、かんば坂を過ぎていくと左右とも深い谷でただ一筋の道が続く、堀切と名付けられている。

はんね石というところには石が多い。

資料編

f) 木曾路名所図会 (文化2 (1805) 年)



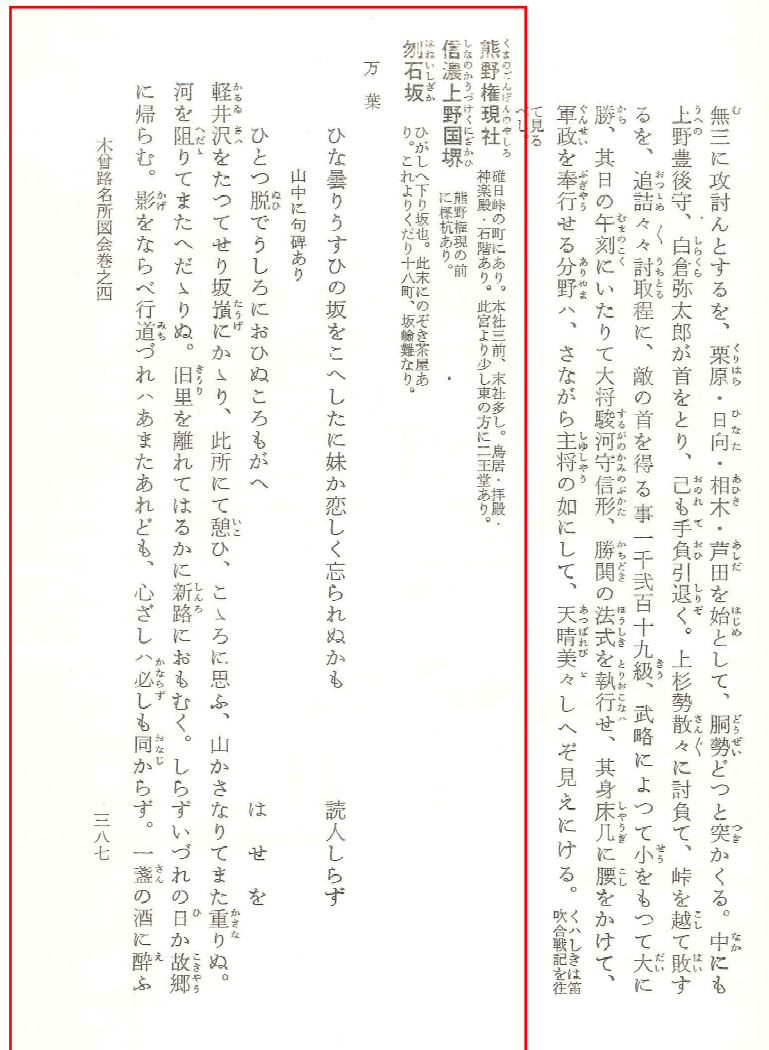
出典：『木曾路名所図会』、文化2 (1805) 年

碓氷峠を訪れたらまず権現(熊野神社)に拝礼し、山中村から剝石坂を下って、覗きの茶屋で憩い、蕨餅を食べて、十八町の下り坂を行くと坂本駅に至る。

坂本(上野) 松井田まで二里半、坂本駅は五町ほど、町中には民家が立ち並ぶ

- 横川
碓氷川の流れ。横川のお関所と呼ばれる看街楼がある。鉄砲と女性を取り調べる。
- 百合若足跡石
小山沢の道の側にある石(言い伝えあり)
- 射抜巖
丸い穴が開いた岩(俗説あり)
- 円山坂
下り坂の下り口に、蓮に似た水鉢の形をした石がある。叩けば鉦(かね)の音がする。

f) 木曾路名所図会 (文化2 (1805) 年)



出典：『木曾路名所図会』、文化2 (1805) 年

熊野権現社

碓氷峠の町にある。鳥居、拝殿、神楽殿、石階がある。ここより少し東の方に二王堂あり。

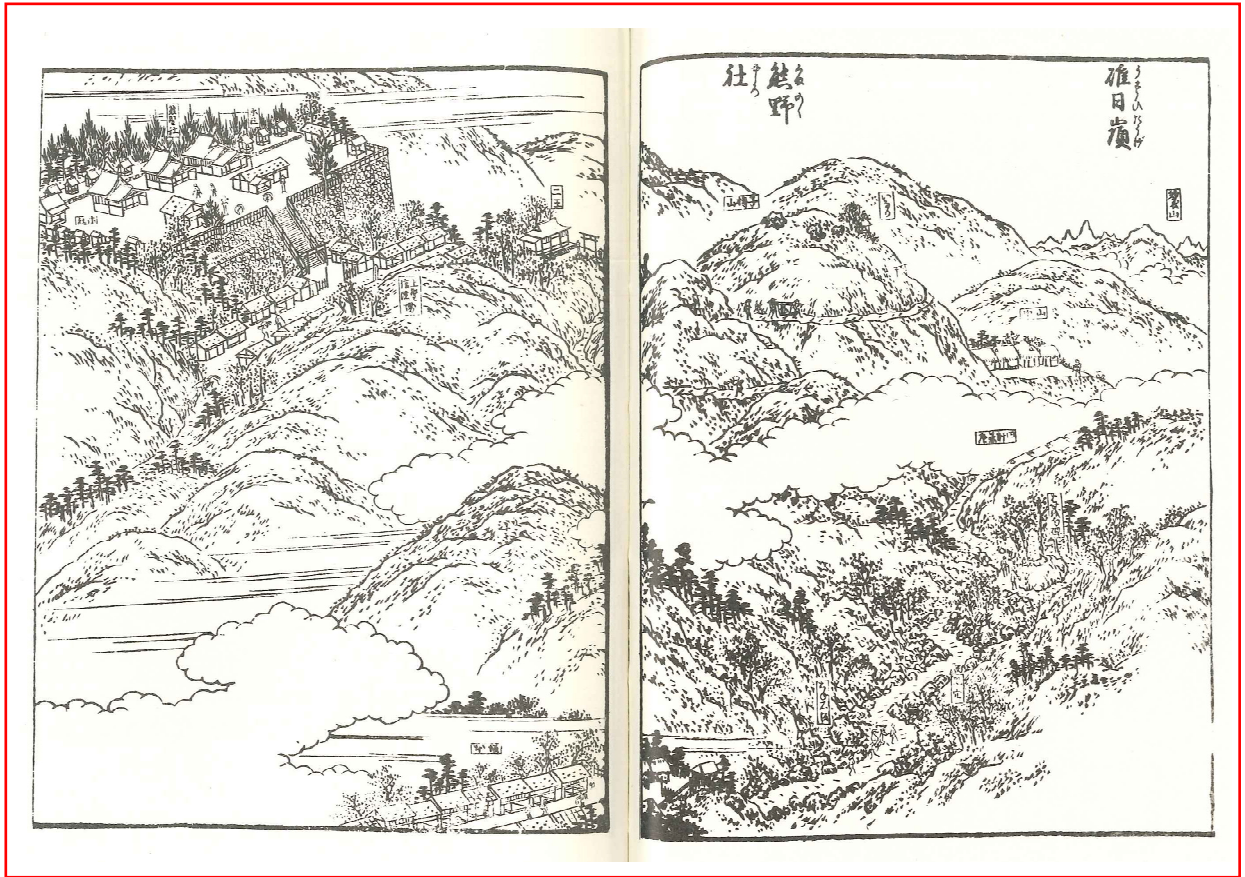
信濃上野国堺

熊野権現の前に標杭あり

勿石坂

東へ向かう下り坂、下った先にのぞき茶屋あり。これより下り十八町は坂道が険しく通過が困難である

f) 木曾路名所図会 (文化2 (1805) 年)



出典：『木曾路名所図会』、文化2 (1805) 年

熊野社

碓氷峠

信濃 上野 境 二王

妙義山

山中
四軒茶屋

坂本宿

g) 木曾の道の記 (文化2 (1805) 年)

枇杷がくぼ
あふ坂

磯部松井田

榛名の山北のかたに遠くみゆ 枇杷がくぼあふ坂といへるあたりより山にかかる谷河あらましく音を立て山の腰をながる このあたり水車作りかけたる屋あまた所あり けふは坂本にやどるべきをと主のこと出きぬとて磯部松井田にとどまり給ふ 申の貝ふく比駅につくにはかなき事なれば長どもいと立さはぎてやうやう宿とるべき屋をつとめてあなひす こよひは保教とをなじ宿り也 例のそぞろごとを書つくとて

いく年の宿りをしめてすみなる民ぞさかひし松井田のさと

白露のあひやどりして草生へりうきもなぐさむ旅のみち芝

明方立出て保教ととも行 のぼり下り坂路多し けふは日のどやかに晴てかさなれるかひより伊那の山みゆ 谷あひの雪まだらに消残れり よべ風のさむかりしもかかればこそと思ひあはせぬ 行かたの山のいただきにまろく穴のあきたる岩あり いぬけ山とよぶ むかし百合君といへる人の弓いて射ぬきたるといへり また又その人の足あとして平く丸なる石のけづり取たらんやうこく出みたるあとあり ここに立て

横川

坂本の駅

穴さまにやいあけたりけむ 横川といへる所に閑あり 安中より番士を置く閑屋はたかき所にありて兵具立ならべ幕引めぐらし公の御調度を検す 事はてみな一列に過 をこそかにいかめし 坂道をのぼり下りて坂本の駅にいたる 宿の中を山水をとたてて流る いこひたる屋の庭につくし山ぶきさかり也

碓ひのとう
げ

はんね石
三枚石

末遠く越て行べき坂本は心とまらぬ宿のやすらひ

碓ひのとうげをばちより行にみちはさのみけはしからねどただ登る坂のみなればをのづから行あへたりみせば坂本の駅の家あむしるを敷ならべたらん様なり 四方の山々打はれたる中に心地はね高くあふがれて眺望いとよし 石の大なるたたみ十ひらばかりもしくべき 小なるは三ひら四ひらもしくべき程なり 路の左右にいくらとなくつづなれり はんね石三枚石などよべるあたりことに多し のぞきいへるあたりは山のふところより大なる岩ほ路にさし出たるがまろびも落ぬべうみゆ 大なる木をかたくその下にたてたればあやうからず そのさきに左右より岩ほさし出て路いとせぼし 重荷をのせる馬も岩ほの道ただ一所のみふめばその路くぼみて穴のごとし このあたりはなべて石のみにていとけはし 路のかたはらにつとさし出たる岩ほの角をばうがちとりて物のさはらぬ様なし地にしける 岩かどは去もてうづめ左右の山ぎはの竹木をきりみぞをほりなどしたり これなんかの姫宮の御下句の御もうけに作りなしたる也とぞ さればむかしよりも人事の労少くかしく御光りをあふぎ奉るにこそをのぼり行て茶店にやすむ この庭に八重桜の薄紅なる今を盛りと咲こぼれてみゆ つくし山吹もさきたり また谷にのぞみてことごと

剝石茶屋

この庭に八重桜の薄紅が咲いている。

出典：『木曾の道の記』、文化2 (1805) 年

g) 木曾の道の記 (文化2 (1805) 年)

41 木曾の道の記

行かたをいそぐ旅路にしばしとて花に立よる木がくれの宿
牛にものおわせてゆきこすうしかひ一人して七八もあつかふにおのれは比坂路をのぼりて手繩はみな角
に結ひつけ牛かひは路よりそくめる こなたの行をみつておうとぞかけたれば牛どもみなかたはらにひ
そみとどまる よく聞しりたるが哀なる はや路やあやとみゆ物を僕認わかしらにはこぶるなりとぞ
こえなづむこの山路のけはしさをなればうしどもおもはでや行

山中村

山中村といへる所にのりものをすべてやすむ ここは桃の花多して茶店のむかひにいく本となく立るが盛
の色あひこと更也 げにききしにたがはずとりどり一時にさき出たる よそにはみぬことぞかし

仙人のすみかななるらん紅の雪とぞみゆ桃のさかりは

例のあまたひきつれてくる中に青牛に乗て紫氣をほらふも有ぬべく覚ゆ 山河ひびきあらやかしくて水の
流の行かたにみえかくれするもおかし

ちかくなり遠く聞へて行川の水音すごき山のかけ道

熊野権現

嶺にいたれば熊野権現の宮の高き所にあり 社人の家あまたその下に立ならば 上野権現のさかひ也とい
ふ坂みちを下り行 むかひにあらはれたる雪とこころに残れり はなれ山はあさまのふもとにしてた

軽井沢の駅

だ薄めにたちたり 軽井沢の駅にかふ 宿の長々に掟すべき事とりをこなふほどかはらけ台にのせてま
へにすゆ 酒はよねかしきる水のごと香のあしき何にとかいほむ さかなものは鳥の子をあつものにして
ましたる也 このあたりは家作よりはじめて女の髪のままものいひもかわりたれば江都のめうつしにはた
だきよからずのみ思ふ さればのみくふものも調にぐたらずようせずばえつれをもなしつべし れいの口
ぐせをはき出てをきましつ

夏深き草葉にうづむ軽井沢下水水やありてすむらん

御向山のふもとを行に四方広野にして地主なく人家すくなければ風いとはげし わた入たるきぬをかさね
たれど乗ものうちいとさむし

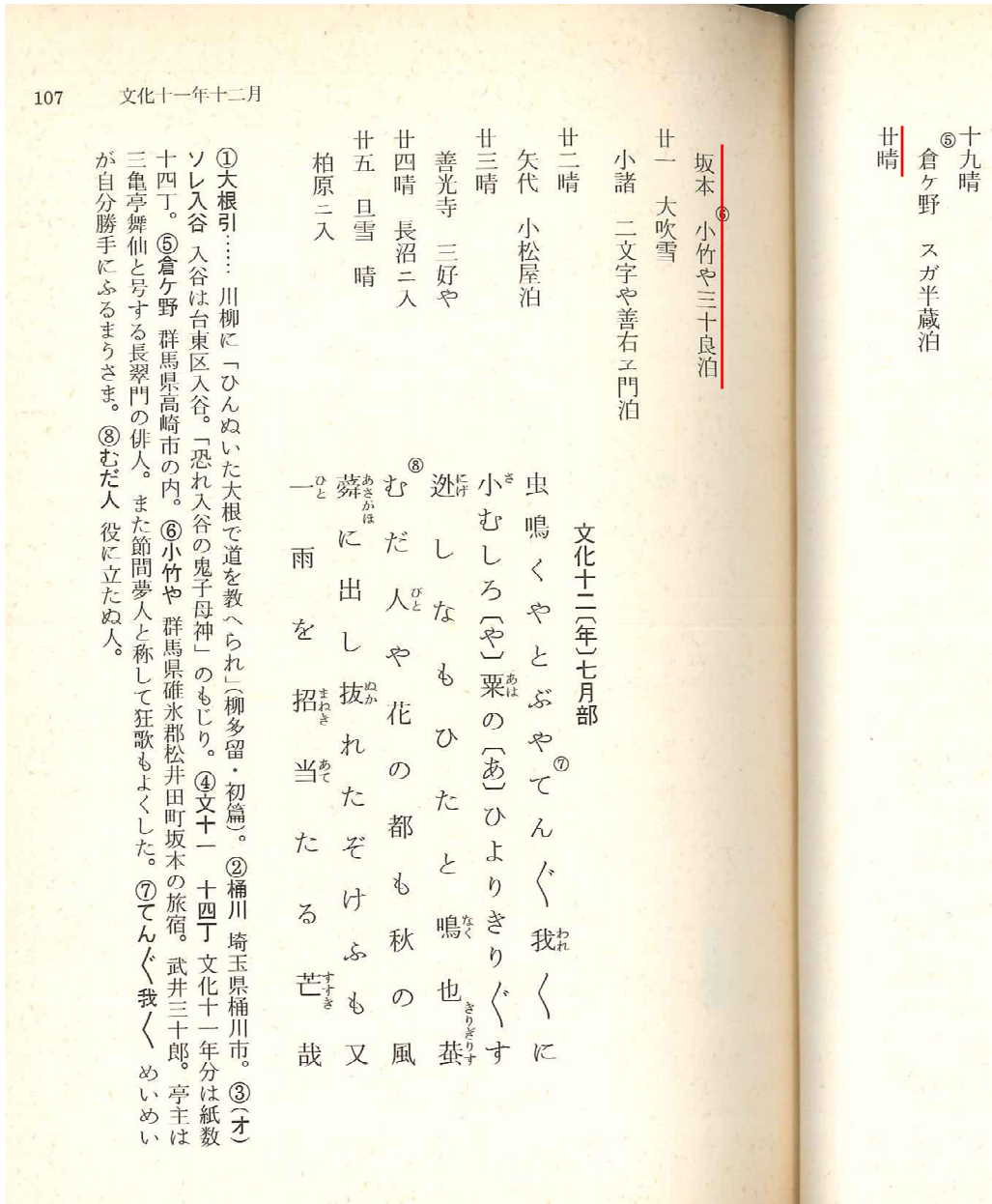
雪もまだ残る浅間の山嵐夏ともいはず吹さまるそら

高根の雲やうやうはれ行て山のすがたあらはにみゆ けに富士にして山の尾ながら引はへたるにいただき

山中村
ここは、桃の花多くして茶店のむかひにいく
本となく立る

出典：『木曾の道の記』、文化2 (1805) 年

h) 一茶七番日記 (下) (文化12 (1815) 年)



107 文化十一年十二月

①大根引……川柳に「ひんぬいた大根で道を教へられ」(柳多留・初篇)。②桶川 埼玉県桶川市。③(才)ソレ入谷 入谷は台東区入谷。「恐れ入谷の鬼子母神」のもじり。④文十一 十四丁 文化十一年分は紙数十四丁。⑤倉ヶ野 群馬県高崎市の内。⑥小竹や 群馬県碓氷郡松井田町坂本の旅宿。武井三十郎。亭主は三亀亭舞仙と号する長翠門の俳人。また節間夢人と称して狂歌もよくした。⑦てんぐ 我く めいめいが自分勝手にふるまうさま。⑧むだ人 役に立たぬ人。

坂本 小竹や三十良泊
 廿一 大吹雪
 小諸 二文字や善右エ門泊
 廿二晴
 矢代 小松屋泊
 廿三晴
 善光寺 三好や
 廿四晴 長沼二入
 廿五 旦雪 晴
 柏原二入

文化十二年(1815)七月部
 虫鳴くやとぶやてんぐ我くに
 小むしろ(や)栗の(あ)ひよりきりぐす
 逃しなもひたと鳴也蚕
 ⑧むだ人や花の都も秋の風
 一ひと 雨を招当たる芒哉

十九晴
 ⑤倉ヶ野 スガ半蔵泊
 廿晴

出典：丸山一彦校注、『一茶七番日記 (下)』、平成15 (2003) 年、岩波文庫

文化12 (1815) 年12月20日晴れ
 坂本にある武井三十郎の旅宿に宿泊し、
 21日に大吹雪で小諸に宿泊している。

i) 金井忠兵衛旅日記 (文政5 (1822) 年)

二日夜
 坂本
 二里半十六丁 吸もの山鳥せり
 大平 色々取合せ玉子とじ
 大鉢 かづの子
 皿 きんぴら牛蒡
 町を出少し 上酒式升ばかり吞み申候
 行く坂 夕飯 蛙塩引 平 里いもとうふ
 あり此所に 中 つけなす 汁 白みそ
 遠見御番所 朝 餅
 あり 血 ぶりの切り身 平 とうふ里いも
 しみこん 椎茸又かわり茸 是は外の
 泊りへ出す平へ椎茸を入れたるものなるべし
 斯くの如き馳走故、茶代共金式分遣す。
 外に宿方つちや弥四郎方に居候太夫
 君太夫居合せ上酒登見舞に出し候故式未遣す
 碓氷峠 はんね石 難所なり
 ひとつぬいでうしろにおいぬ衣更 翁
 みねの茶屋
 山中の茶屋

二日夜
 坂本
 二里半十六丁 吸もの山鳥せり
 大平 色々取合せ玉子とじ
 大鉢 かづの子
 皿 きんぴら牛蒡
 町を出少し 上酒式升ばかり吞み申候
 行く坂 夕飯 蛙塩引 平 里いもとうふ
 あり此所に 中 つけなす 汁 白みそ
 遠見御番所 朝 餅
 あり 血 ぶりの切り身 平 とうふ里いも
 しみこん 椎茸又かわり茸 是は外の
 泊りへ出す平へ椎茸を入れたるものなるべし
 斯くの如き馳走故、茶代共金式分遣す。
 外に宿方つちや弥四郎方に居候太夫
 君太夫居合せ上酒登見舞に出し候故式未遣す
 碓氷峠 はんね石 難所なり
 ひとつぬいでうしろにおいぬ衣更 翁
 みねの茶屋
 山中の茶屋

二日夜
 坂本
 二里半十六丁 吸もの山鳥せり
 大平 色々取合せ玉子とじ
 大鉢 かづの子
 皿 きんぴら牛蒡
 町を出少し 上酒式升ばかり吞み申候
 行く坂 夕飯 蛙塩引 平 里いもとうふ
 あり此所に 中 つけなす 汁 白みそ
 遠見御番所 朝 餅
 あり 血 ぶりの切り身 平 とうふ里いも
 しみこん 椎茸又かわり茸 是は外の
 泊りへ出す平へ椎茸を入れたるものなるべし
 斯くの如き馳走故、茶代共金式分遣す。
 外に宿方つちや弥四郎方に居候太夫
 君太夫居合せ上酒登見舞に出し候故式未遣す
 碓氷峠 はんね石 難所なり
 ひとつぬいでうしろにおいぬ衣更 翁
 みねの茶屋
 山中の茶屋

二日夜
 坂本
 二里半十六丁 吸もの山鳥せり
 大平 色々取合せ玉子とじ
 大鉢 かづの子
 皿 きんぴら牛蒡
 町を出少し 上酒式升ばかり吞み申候
 行く坂 夕飯 蛙塩引 平 里いもとうふ
 あり此所に 中 つけなす 汁 白みそ
 遠見御番所 朝 餅
 あり 血 ぶりの切り身 平 とうふ里いも
 しみこん 椎茸又かわり茸 是は外の
 泊りへ出す平へ椎茸を入れたるものなるべし
 斯くの如き馳走故、茶代共金式分遣す。
 外に宿方つちや弥四郎方に居候太夫
 君太夫居合せ上酒登見舞に出し候故式未遣す
 碓氷峠 はんね石 難所なり
 ひとつぬいでうしろにおいぬ衣更 翁
 みねの茶屋
 山中の茶屋

二日夜
 坂本
 二里半十六丁 吸もの山鳥せり
 大平 色々取合せ玉子とじ
 大鉢 かづの子
 皿 きんぴら牛蒡
 町を出少し 上酒式升ばかり吞み申候
 行く坂 夕飯 蛙塩引 平 里いもとうふ
 あり此所に 中 つけなす 汁 白みそ
 遠見御番所 朝 餅
 あり 血 ぶりの切り身 平 とうふ里いも
 しみこん 椎茸又かわり茸 是は外の
 泊りへ出す平へ椎茸を入れたるものなるべし
 斯くの如き馳走故、茶代共金式分遣す。
 外に宿方つちや弥四郎方に居候太夫
 君太夫居合せ上酒登見舞に出し候故式未遣す
 碓氷峠 はんね石 難所なり
 ひとつぬいでうしろにおいぬ衣更 翁
 みねの茶屋
 山中の茶屋

二日夜
 坂本
 二里半十六丁 吸もの山鳥せり
 大平 色々取合せ玉子とじ
 大鉢 かづの子
 皿 きんぴら牛蒡
 町を出少し 上酒式升ばかり吞み申候
 行く坂 夕飯 蛙塩引 平 里いもとうふ
 あり此所に 中 つけなす 汁 白みそ
 遠見御番所 朝 餅
 あり 血 ぶりの切り身 平 とうふ里いも
 しみこん 椎茸又かわり茸 是は外の
 泊りへ出す平へ椎茸を入れたるものなるべし
 斯くの如き馳走故、茶代共金式分遣す。
 外に宿方つちや弥四郎方に居候太夫
 君太夫居合せ上酒登見舞に出し候故式未遣す
 碓氷峠 はんね石 難所なり
 ひとつぬいでうしろにおいぬ衣更 翁
 みねの茶屋
 山中の茶屋

本日記は、正月2日(太陽暦の2月5日)に坂本より、伊勢参りに出発した記録である。この日記では、出発の2日目の夜に、坂本宿に泊まり、軽井沢を通過し、3日の夜に沓掛に泊まっている。

出典：『金井忠兵衛旅日記』、文政5 (1822) 年

資料編

j) 日光道の記（藤原定祥の旅日記）（天保12（1841）年）

追分

沓掛の駅

離山
軽井沢の駅

碓氷の嶺
熊野権現の社

き出したる石など今も猶原中にいくらもあり。うちみには重げなるもいとかるし。追分といふ所を過。こは北国とみやこの分れ道なればかくいふとなん。此所に浅間のふじおがみの屋ありし跡あり。神主なりとていと心得ぬさましたるが浅間山の画図を送り例なりとて山の名所をさしおしゆ。けふは雲かかりて中らより下のみ見えたり。嶺まで二里廿九町ありといへり。程なく沓掛の駅をすぐ。ここより南東に山多くみゆ。南は甲斐がねなり。東は芝山なり。こは上野の妙岐山よりつづきたる山々なりといへり。されどけふはくもりたれば只かすかにみゆ。浅間山の前に離山とて原中に小山あり。これをめぐれば軽井沢の駅なり。此里までは皆原中なり。此あたりに牧あるにや馬をはなちかへり。此駅のこなたより上野の荒曾根山もみゆるといへどもくもりたれば見えぬ。浅間の北ひんがしに小浅間てふもみえたり。しばしば坂をのぼれば碓氷の嶺なり。道の北の方に熊野権現の社あり。いとねんごろにいとみ立たり。本宮新宮願宮の三

つの社又神楽殿御供所などもありていと物ふり神さびたり。広前にぬかづきて旅路事ならんやう折まつりてそこらみぐる。神つかさあないしぬ。ここより妙義山筑波秩父の嶺をはじめ坂東八か国の山々二荒山榛無山赤城山などもみゆるといへども坂道をのぼるほどより霧ふかく立ちこめ咫尺もわかぬばかりなればただ聞わたるのみ。又社のうしろの嶺にのぼれば不二の峯もみゆるといへずどみえず。かかる嶺にのぼるごとくに雲霧立わたりて名におふ山々をよくもみぬいと本意なし。此嶺は日本武尊坂東をみやり給ひて吾妻はやとの給ひしより此峯の東をあづまといへる事など思ひて

丈夫と聞えし君も吾妻はと忍び給ひし昔おほほゆ

千早振神代よりしも名に高きうす水の嶺をけふみつる哉

神つかさの家にあないして盃とて出で神酒をすすめ又とりどりあるじもうけしなり。又此山の桜なりとて八重桜のいとめでたきをおくれり。常は一重のも此頃咲ぬれど今年のみなちりたり。こはここにて遅桜なりとぞ

夏の日のうすみの嶺の桜花時得がほなる色もめづらし

磐石坂

しばしいこひて坂路を下る。のぼりの程はいとわづかなれどくたりは一里半余ありて一里ばかりののち廿四町がほどを磐石坂といひて大石を切りひらきて道とせし坂あり。其坂にかからんとする所に小家あり。人のいこる所なり。其あたりより日暮ぬれば松ともして行に雨さへふり出たり。かかる名におふ所にて日はくれ雨さへふりぬればわびしともいといわびし。たどるたどる行をみるに前なるもののかしらうへを行かど覚ゆるほどのけはしさかたへは山高くかたへは幾千尋ともわきがたき谷にてめくるしばかりの所なり。そがうへ巖を切りきたる道なれば岩かど高く又雨にてなめらかなればいとあゆみがてなり。やうやうたどりて

坂本の駅

戌の半過る比坂本の駅に来つきぬ。皆はじめて人こちになりて事なく下りはてぬるをよるこびあへり。十一日。夜あけてやどりをいづ。けふは雨もふりぬるに風のこちさらにとくるしければたれこめてのみゆく。いとわびしき事かぎりなし

出典：『日光道の記（藤原定祥の旅日記）』、天保12（1841）年

磐石坂

少し休んで坂道を下る。上りの距離はわずかだが、下りは一里半ほどあり、一里と二四町ほどを磐石坂といい、大石を切り開いて道を通したという坂がある。その坂にかかろうという場所に小さな家がある。人の休める場所である。その辺りから日が暮れ、松明をともして行こうとすれば雨が降り出した。ここで日暮れで雨が降るとはとてもつらい。辿っていく道を見ると、一方は山高く、一方は非常に深い谷で見るもつらい険しいところである。岩を切り開いた道であるため、岩かども高く、また雨で滑りやすく歩きにくい。なんとか通過して坂本の駅につく。歩いてきた人は皆、ここでようやく無事に下ってこれたことを喜びあうのである。

軽井沢の駅

今日は曇っていてかすかに見える浅間山の前に、離山という小山がある。これを巡ると軽井沢の駅がある。ここまではずっと原の中で、このあたりにも牧があり馬が放牧されている。この駅から上野の荒曾根山もみえるというが、くもっていて見えない。浅間の北東にある小浅間は今日も見える。しばらく坂をのぼれば碓氷の嶺となる。道の北の方には熊野権現の社がある。三つの社と神楽殿、御供所などもある。

ここからは妙義山、筑波、秩父の嶺をはじめ、坂東八か国の山々に二荒山、榛名山、赤城山などもみえるというが、坂道をのぼるほど霧が深く立ち込め見えない。また、社のうしろにある嶺をのぼると不二の峯もみえるというがこれも見えない。嶺にのぼるたびに雲霧が立ち込め、山々を見ることができず残念。

k) 善光寺道名所図会 (天保14 (1843) 年)

らん跡を止めず、往古より只雌雄二つのみ四季とも常住にて、時々人里近く立渡れども、神鳥なりとて獵人も是を不射となん、扱眼を究めよく／＼看るに、松は黒く其中に白く半月の如く一つ見へたり、即鶴なりといふ、二つ見ゆる事は常なりとぞ、予俚老の談に依て眺望之、

○碓氷峠 上州碓氷郡に拘る、右の名なるべし、 熊野権現の宮立給ふ、若宮の社は

祭神日本武尊当山の地主と称す、例祭六月十五日、前夜に紀州熊野より榎の葉降、頭白き鳥来り、杜内の樹木に宿すること往古より変る事なし、又当山の熊笹の

葉紀州熊野へ降となり、

本宮山三首歌

ちハヤふる熊野の宮の榎の葉をかはらぬ千代のた

めしにそひく

定家

夫当山は鎮座の歴代不知、社領なく、古来より諸役免除の社格にして、守護不入の神地なり、此嶺ハ信州上州の境にて、拜殿の屋根片方ハ信州、片方ハ上州より修理するなり、国分の神社と自称するも此故にあらむやかし、神人凡て四十五人あり、廿三軒上州方、廿二軒信州方、各家系の祖

先を知らず、古記録なし、古いかな尊きかな、独神代より連綿して、此高岳に世を累ね、神に仕る外亦他事なく、正路にして神代の余風を不失、神境とも謂つべし、大昔日本武尊東征し給ひ、碓日嶺より辰巳の方を眺て、橋姫を慕ひ、三たび歎いて、吾嬬者耶々々々と宣ひしより、東の方を吾嬬といひ慣しけると日本書紀に見へたり、此嶺より東を眺れば、武蔵・下総・常陸・上野の山々、筑波山・日光山など殊に高く見へたり、社輩凶葬の事、当主嫡男ハ各の裏に葬て、僧侶の吊に拘らず、庶子婦人の分ハ軽井沢の神宮寺に送る、以上ハ社家水沢河守亮話、于時行年七十六才、

此山中鹿多し、秋はその声寥亮にかなし、たま／＼白鹿見ゆ、雪の如しといへり、又此峠は寒気甚しく、五穀の類熟らず、野菜もなしといふ、則冷際に到るなるべし、

附録

○信州より他国へ流出の川々其大概 近国大川の水源にて、外より入水なし、

出典：『善光寺道名所図会』、天保14 (1843) 年

碓氷峠

熊野権現神社が建ち、例祭は6月15日

山中には鹿が多い。たまたま白鹿をみたが雪のようである。

寒さが厳しく、五穀は熟せず野菜もなく、すぐ冷えてしまう。

m) 癸丑遊歴日録 (吉田松陰の旅日記) (嘉永6 (1853) 年)

- 一 現在の小果郡長門町長久保
- 二 笠取峠であらう
- 三 現在の長野県北佐久郡立科戸田
- 四 現在は北佐久郡望月町
- 五 塩名田も八幡も、共に北佐久郡浅科村に属する。この道順は、正しくは八幡より塩名田に出る。
- 六 現在は長野県佐久市岩村田
- 七 内藤豊後守をいう。
- 八 現在
- 九 江戸幕府の遠国奉行の一伏見にいて、その地の民政、木津川の船政、近江・丹波の幕府直轄地の民政を行ない訴訟を裁断した職。
- 一〇 現在は佐久市小田井
- 一一 現在の北佐久郡軽井沢町追分
- 一二 現在の軽井沢町香掛
- 一三 現在の長野県小諸市
- 一四 ここでは軽機(かぎ)のこと
- 一五 木曾路は、ちょうど梅雨の季節であったが、非常に涼しかった。
- 一六 稲の苗を植えたのも。
- 一七 かいこを飼うこと、養蚕
- 一八 信濃・上野

- 一 現在は安中市板鼻
- 二 現在は高崎市倉賀野町
- 三 現在は群馬県多野郡新町
- 四 現在は群馬県高崎市岩鼻町
- 五 上野・武蔵
- 六 現在の埼玉県児玉郡上里村嘉美
- 七 現在は埼玉県児玉郡児玉町
- 八 現在は埼玉県大里郡岡部町藤沢
- 九 現在は埼玉県深谷市
- 一〇 現在は埼玉県深谷市に属する。
- 一一 五いに入り混り、となり合っている。
- 一二 田畑の中
- 一三 この日のことは、第四巻の嘉永六年五月二十四日の第七・七四号に杉梅太郎宛書簡参照のこと。
- 一四 剣豪。儒者と号した岡田十松の門を嗣ぎ、長州藩士の多くはこの門に入り、柱(後の木)は後にこの塾頭となった。また松陰は弥九郎の嗣子新太郎と親交があった。
- 一五 たち寄り
- 一六 名は正路。松陰の父の親友。国学に長じ、蔵書が多く、松陰は杉家御明中、この人から本を借りて読んだ。関白
- 一七 松陰の長学門下

癸丑遊歴日録

三三四

二十日 朝霧、已にして晴る。和田を發し長久保に至り、一嶺を越え、蘆田・望月を經。望月にて津和野侯龜井隴州の西歸するに遇ふ。鹽名田・八幡・岩村田を經。岩村田は内藤豊後守が陣屋の在る所なり。鹽名田は伏見奉行となりて聲名あり。小田井・追分を經て、杏掛に宿す。是の日、左に淺間嶽を視、其の脚を環りて過ぐ、經る所に小諸侯牧野遠州の封地及び代官鈴木大太郎の管する所あり。行程十一里半。木曾の地は山深く氣清みて、夜間蚊なし。三戸野以往は夜寐るに帳幕を用ひず。而して追分・杏掛も亦地大山の脚に在り、清涼他と異り、絶えて蚊の患なし。(詩あり、云はく)

5月21日

蘇道梅天不耐涼 蘇道梅天源に耐へず、山郷風物異他郷 山郷の風物他郷に異る。新袂挿後奏猶綠 新袂の挿後奏は綠に、正是家々蠶事忙 まさに是れ家々蠶事に忙し。

二十一日 終日曇り。杏掛を發して輕井澤に至る。嶺あり、碓氷と曰ふ。上り十八町、下り二里半。嶺上を信上の界と爲す。信の佐久郡の地、鈴木木の管する所はここに止み、上の安中侯板倉伊豫守の封地碓氷郡こより起る。嶺の下を坂本驛と爲す。右顧すれば則ち妙義山あり、左視すれば則ち榛名山窺ゆ。安中に至り、彦根侯の西歸するに遇ふ。坂本・安中の間に横川の關あり、安中を過ぎて碓氷川あり。川の西は安中の封地にして、川の東は則ち代官林部善太左衛門の管する所なり。板鼻を經て高崎に入る。高崎の前に川あり、高崎川と爲す。高崎は松平右京亮の都城なり。ここに至りて宿す。是の日過ぎし所、尤も多く黃鸞殿を見る。行程十一里。

二十二日 晴。高崎を發し、倉加野・新町・本庄・深谷を經て、熊谷に宿す。行程十里二十三町。倉加野・新町の間、岩鼻に林部の陣屋あり。本庄・深谷の間、普濟寺村に安部虎之助の陣屋あり。倉加野・新町間に烏川あり、舟にて之れを渡りしに、又一小川あり、上武の界と爲す。○武州、賀美、兒玉・榛澤・大里・旗本。

二十三日 晴。熊谷を發し鴻巣に至る、此の間四里八町。桶川・上尾・大宮・浦和を經て、蕨に宿す。行程十二里。經し所は皆足立郡に屬す。其の大里郡に屬するは熊谷の一驛のみ。地は忍侯の所封及び代官江川太郎左衛門・林部善太左衛門・望月新八郎・勝田次郎の管する所あり、錯雜相接す。此の間の畝中に多く桐樹を植う。

二十四日 晴。蕨を發し、板橋を經、亦勝田次郎の管する所なり。白山に至り、田邊定輔と別れ、齋藤彌九郎の塾に過り、桂小五郎・松村文祥・赤根幸輔を訪ひ、桶町河岸に至りて鳥山新三郎を訪ふ。新三郎出でて未だ歸らず、北條秀英在り。書を藩邸の瀬能吉二郎及び工藤半右衛門・井上壯太郎に致す。瀬能、僕を遣はし并せて在園より託せし所の書籍衣服を贈る。又、

癸丑遊歴日録

三三五

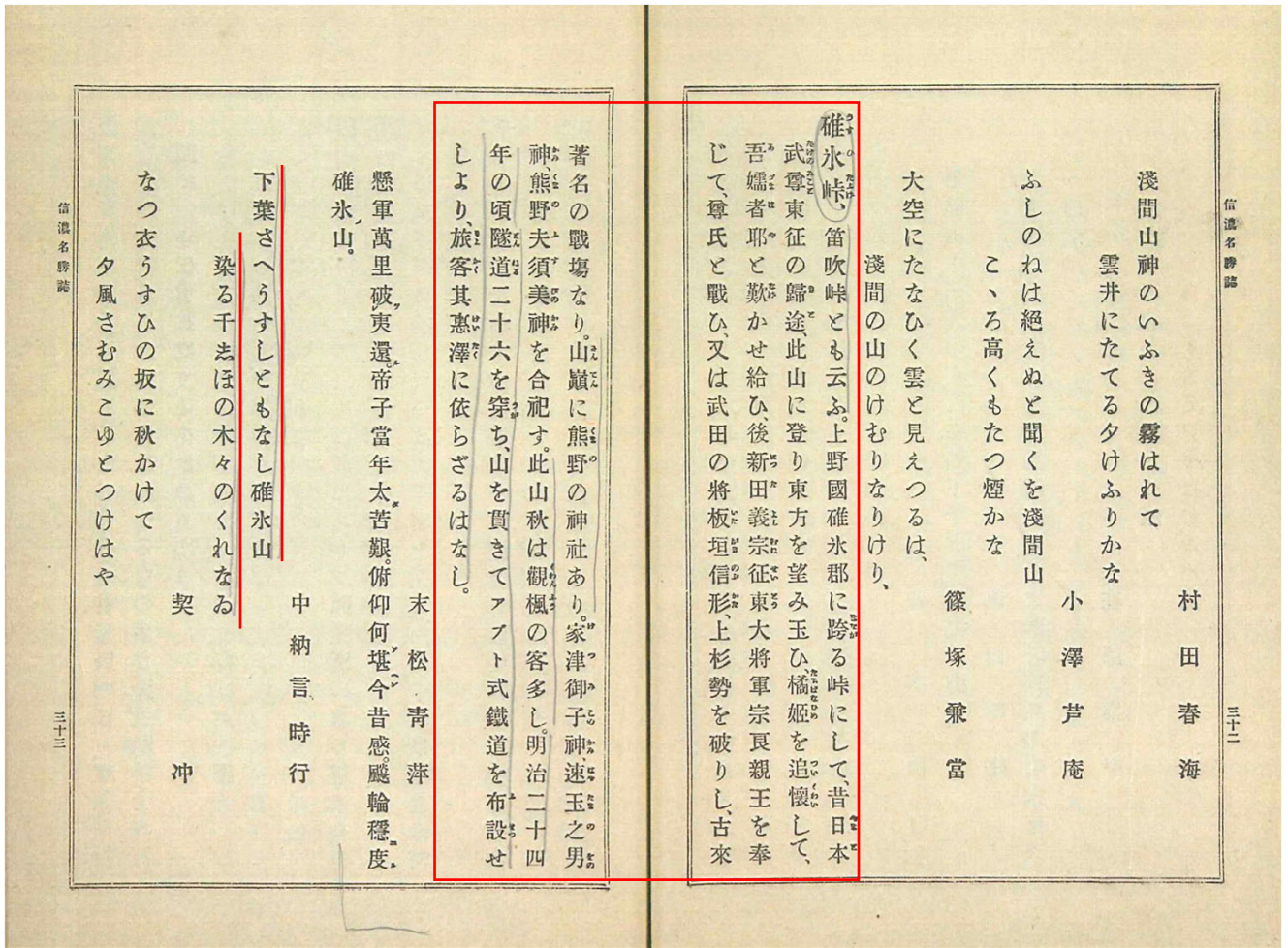
出典：『癸丑遊歴日録 (吉田松陰の旅日記)』、嘉永6 (1853) 年

21日

終日曇り

杏掛を出発して、輕井澤にいたる。碓氷峠という峠があり、上り十八町、下り二里半峠の頂上が信州と上州の境
 信州の佐久郡で、鈴木が管理するところはここまで、上州の安中侯板倉伊豫守の治める碓氷郡はここから始まる
 峠のふもとに坂本駅がある
 右を振り返ってみると妙義山、左を振り返ってみると榛名山がそびえる

n) 信濃名勝地誌 (明治35 (1902) 年)



出典：『信濃名勝地誌』、明治35 (1902) 年

碓氷峠
 笛吹峠ともいう。上野国碓氷郡にある峠で、古来から著名な戦場である。山頂に熊野神社がある。秋は紅葉を楽しむ客が多い。明治24 (1891) 年頃、26のトンネルを穿ち、山を貫いてアプト式鉄道を敷設したことで、旅客はその恩恵を受けている。

碓氷峠は中山道の往還に衝り郡の西端即ち信濃、上野二國の境に在る峻嶺なれば中山道第一の天険と云はれてをつた。茲處には古くから關所があつて行旅を嚴重に點檢した場所。その昔日本武尊東征の歸途その妃弟橘媛を追懐せしといふ有名な所なりといひ傳へてをる。

この峠を越ゆる山路は坂本町より起りて新舊二道ある、新道は明治十六年の開通で殆んど舊道に沿うて走り、舊道は北方に向つて通じてをる、即ち堂峰、羽根石（勿石）の嶮を越え釜場、堀切、霜原山中、子持山、陣馬ヶ原を過ぎ峠町権現を経て信濃に達するの順路である。その行程、紆餘曲折登攀には頗る難儀をするが宛も昇天の趣があつて、而も人馬俱に必ず此所を通過せねばならぬ要衝嶮難の地なるより、東海道箱根、足柄の天険と並び稱せられたものである。

新道には開通の當時より馬車鐵道を運行して通行者の便を計りしを、明治二十六年信越線が全通して以來といふものは、新舊道二つながら顧みるものなど全くなくなり、今は人跡も絶えて榛莽生ひ茂り昔の偉さへ知り難く自然と荒廢に委ねつゝあるは如何に時代の變遷然らしむとは云へ、この様なことは恐らく古人の夢想だにせざりしことと思はれる。

鐵道は山麓に横川驛を置き中腹に熊の平線を設け峠を横斷して輕井澤に至る、その間約七哩我が國

鐵道線路中第一の難所にてアプト式軌道による十五分の一の勾配を登り二十有六の隧道を出入する。

その様は恰も風を加へし走馬燈の如くこの間車窓より天を摩するかと疑ふ峻嶺を仰ぎ、俯して千仞の溪谷を瞰めば嵐氣搖曳、白雲空湧、坂東平野の平凡なる景色に倦みたる旅客をして急に羽化登仙の思ひを生せしめ坐ろに快感を興へてくれる。殊に満山錦繡を彩る紅葉に至つては恰く人口に膾炙する處近時この多數のトンネルを通過するに電氣機關車を使用するため、少しも煤烟の不快を感ずることなく洵に交通政策の御蔭なりと此處を過ぎる旅客は皆等しく謳歌して止まない。

撓みなき汽車の進行と共に頂上に達する頃標高三千百四十尺の頂界標が不圖眼に着く、此處より徒歩にて東へ二里程降れば坂本宿に着く、其處の標高千六百六十尺に比ぶれば登攀實に約二千尺の差あるにより、その峻嶺なることは直覺的に知ることが出来るのである。

一、碓氷峠越の記事

【千曲の眞砂】 碓氷峠は坂本宿の末より直に山へ登る松の木坂、遠見の番所、大阪を過ぎて、さし出たる磐石あり、俗にはんね石といふ、その上に石の地蔵菩薩立ち給ふ、三枚石、硯石なんと第一の難所を越えて二三の茶屋あり、名物餅を商ふ、往昔日本武尊の東征し給ひて碓氷の嶺に登り辰巳の方を望んで吾孀者耶と歎き給ひしは此處なるべし、この坂上は東國一眼下に見え青山斷て雲の如

出典：『碓氷郡志』、大正12（1923）年

第二節 碓氷峠

中山道の往還において西端、信濃と上野の二國の境にある峻嶺で、中山道第一の天険といわれていた。

古くから關所があった。
古来のいわれがある名所

峠越えの山道は、坂本町から新旧二道ある。

新道は明治16（1883）年の開通でほとんど旧道に沿って走り、旧道は北方へ向かい、堂峰、勿石の險難を越え、釜場、堀切、霜原、山中、子持山、陣馬ヶ原を過ぎ、峠町権現を経て信濃に達する順路。

新道の開通時は馬車鐵道を運行して通行者の便をはかっていたが、明治26（1893）年信越線が全通して以來、新道旧道とも顧みる人はいなくなり、今は人跡も途絶えて荒廢が進んでいる。

○) 碓氷郡志 (大正12 (1923) 年)

碓氷郡志

三五四

し、それより上杉景勝の堀切、作り道、釜場など過ぎて山中の茶屋あり、長坂を登り二王堂あり、それより嶺の茶屋に至る杓子を賣る故に杓子町といふ、皆熊野の社の御師なり、熊野三社権現立ち給ふ、道の右に石壇あり、上信の國境なり、これより少し降るをひじり坂といひ、小川あり坂垣信形の上州勢と戦ひし所とて、すぐに輕井澤宿へ入る (蜀山人千茂紀行)

信濃と上毛の界なりといふはへ坂、長坂を越えて管澤といふ所にいたる、清水流れ出づ、丸き山あり子持山といふ、姥がふところ、ばらむきが平、などいふ所を過ぐ、このあたりより吾妻のかなたをながめやるに、日本武尊のむかし思ひ出らる、山中坂を上りて立場あり、賑はしき茶屋あり、まこめ坂を過ぎて右の方にいとけはしき岩山ならびたり、御林の山といふ、麓に御林あり板倉伊豫守の御預りなり、八人山伏といふ岩又地藏といふあり、その後は妙義の山なりといふ、これまで岩山をみしかど、かゝる險しき岩の色黒きが雲を凌ぎてたてるをみず、唐畫にかける山のごとし、入道が窟をすぎてくりから平にいたる、これより左の方をみれば又さかしき岩あり天狗岩といふ、行き行きて直に絶壁にのぞむ、こゝを座頭ころばしといふも宜なり、細き道を左にとりて、かんば坂をすぎゆけば左右ともに深き谷にして、たゞ一筋の道あり堀切と名づく、むかし豊臣氏小田原を攻めたまひし時、大導師駿河守政繁この坂をほりきりて、北國勢をふせぎしが、上杉景勝、前田利家の

ために破られしとなん誠にさかしき所といふべし、はんね石といふ所には岩多し、観音、風穴などいへる谷々をこえ赤土坂を下りゆけば左に鳥居あり坂本の驛につく。

第三節 碓氷峠と日本武尊

景行紀云、日本武尊自甲斐北轉歷武藏上野西逮于碓日坂時尊每有願弟橘媛之情故登碓日嶺而東南望之三歎曰吾孀者耶故因號山東諸國曰吾孀國也於是分道遺吉備武彦於越國令鑿察其地形險易及人民順不

出典：『碓氷郡志』、大正12 (1923) 年

碓氷峠は坂本宿の端から直に山へ登る松の木坂、遠見の番所、大阪を過ぎて、刎石と呼ばれ、飛び出した大きな岩もあり、その上には石の地藏菩薩が立っている。三枚石、覗石などの第一の難所を越えると二三の茶屋があり、名物の餅を売っている。

碓氷の坂の上には東国すべてが眼下に見える絶景で、上杉景勝の堀切、作り道、釜場などを過ぎると山中の茶屋がある。長坂をのぼると二王堂があり、それより嶺の茶屋に至ると、杓子が売れるため杓子町と呼ばれており、その師は熊野神社に仕えるものである。

熊野三社権現神社が立ち、その道の右には石段があり、上信の國境となっている。これより少し下りたところがひじり坂、小川が流れ、かつての戦場でもある。その先はすぐ輕井澤宿。

p) 鉄道旅行案内 (大正13 (1924) 年)

279 線 越 信

津鐵道の分岐點、上野から約五時間、海拔三千八十呎の高原で大氣新鮮水清冽、風に一味の冷あり、靜座すれば盛夏尙輕寒を覺ゆる、毎年避暑の内外人多く、其別墅相望んでゐる。旅館油屋、丸本、一田屋、(新輕井澤) 三笠ホテル、萬平ホテル、要屋、輕井澤ホテル、萬松軒、鶴屋(舊輕井澤) ▼淺間山、西北四里 ▼草津温泉、草津鐵道にて行く、嬭戀驛まで賃金三等一圓三十九錢、二等二圓四十五錢、嬭戀から草津まで三里、自動車二圓、俵三圓、

【横川】(よこかは) 一八哩四 碓氷嶺を越ゆる電気機關車の準備驛である、驛南には鼻曲山、妙義裏山が聳え、碓氷の溪澗深く山色水聲俗塵を絶つてゐる。旅館萩野屋 【熊ノ平】(くまのたひら) 二二哩三 ▼碓氷の紅葉、驛附近數里、紅葉狩には先づ輕井澤に下車して舊街道を横川又は熊ノ平に出るがよい、輕井澤より二十五丁を登つて碓氷嶺の絶頂に至れば熊野神社がある、輕井澤の高原を西にし、碓氷の溪谷を脚下に、前面には妙義の奇峯を始め、秩父甲斐の連山聳え、東北には榛名、赤城の諸峯連互し、茫漠たる關東平野を展開してゐる。世に日本武尊が弟橘姫を追慕せられた處と傳ふる遺跡は、社邊十數丁を隔て、尊の倚られたといふ思婦石がある。時より下り半里の間は薄が多く、満目悉く白く秋の日に光り、時に碓氷の溪流の涼々たるを聞く。熊野神社前より熊ノ平に至る道は紅葉道と云ひ約一里餘、道は山の背を縫うて稍峻しいが、見渡す所左も右も満山これ紅葉で、鳥聲人語も亦赤からんとする壯觀を現する。名物力餅 【輕井澤】(かるゐさは) 二五哩三 草

神斧鬼鑿を極めてゐる。三山の中金鷄は最低くして最險、何枚折かの屏風を立てたるが如く、石は挺秀山は崢嶸立膝行尙難んずるが如き處もある。金洞は石門の奇を以て三山中最高、石門の數幾十、人の稀に至るもの其第十六門迄に過ぎぬ、第四門の邊奇景を極む、白雲は最高くして最幽邃、山麓に妙義神社がある。要するに此山は火山岩の奇秀を極盡するもので、殊に紅葉の大觀に接せん爲秋季登山する者が多い。妙義町旅館菱屋、玉屋、東雲館

出典：『鉄道旅行案内』、大正13 (1924) 年

横川

碓氷峠を越える電気機関車の準備駅。駅南には鼻曲山、妙義裏山があり、雨水の溪谷は深く山色水聲、俗塵を絶っている。旅館萩野屋がある。

熊ノ平

碓氷の紅葉、紅葉狩り

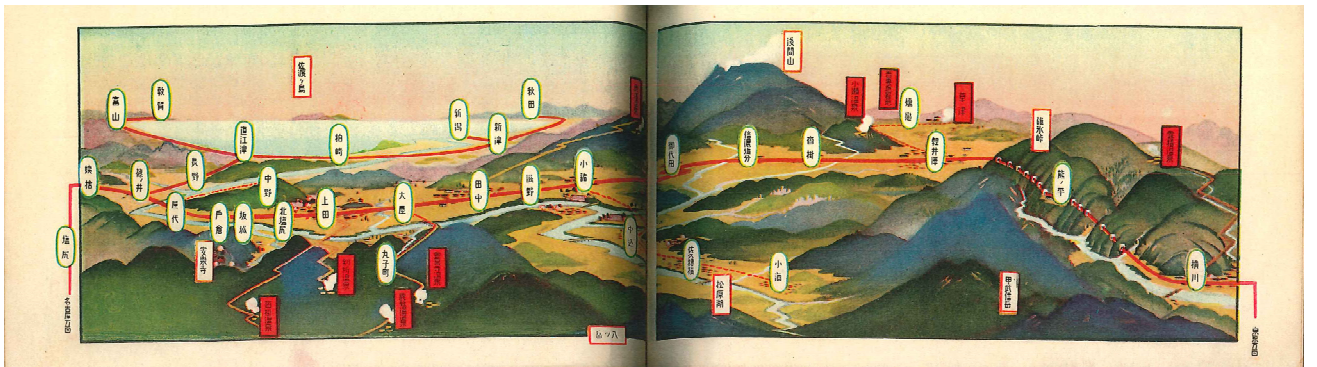
輕井澤より25丁登って碓氷峠の頂上には熊野神社がある。

風光明媚な場所

峠から下り半里の間はススキが多い。

熊野神社から熊ノ平に至る道は紅葉道と呼ばれる約一里ほど、

左右見渡す山は紅葉で壯觀。名物は力餅。



歴史の道中山道碓氷峠越 整備に伴う調査報告書

令和4（2022）年3月発行

編集・発行：群馬県安中市教育委員会 文化財保護課
〒379-0123 群馬県安中市上間仁田 951 番地
電話：027-382-7622 Fax：027-382-7623
印刷：三和印刷株式会社
